文元榮枯録

自四至六

内閣文庫
和書 類
七五九二 號
九 冊
一五一 函
一八 架

内閣文庫
番號 和 7592
冊數 9(3)
函號 151 219

文元栄枯録目次　巻之四

一　加賀小松城主　拾二万石　丹羽加賀守長重事

一　豊後府内　同　二万石　福原右馬助直高事

一　豊後富来　同　一万石　垣見和泉守家純事

一　豊後安岐　同　一万石　熊谷内蔵允直陳事

一　[illegible]　[illegible]万石　平塚因幡守為広事

一　美濃[illegible]　一万石　加賀井弥八郎秀重事

一　伊豫[illegible]　十二万石　安国寺恵瓊長老之事

（蔵書印：数寄屋文庫印、日本政府図書、内閣文庫、浅草文庫 等）

一　近江水口城主　五万石　長束大蔵大輔正家事

一　大和郡山　同　廿万石　増田右衛門尉長盛事

一　肥後宇土城主　廿万石　小西摂津守行長事

巻之五

一　筑後柳川　同　十三万九千六百四十七石　立花左近将監宗茂事

一　豊前小倉　同　六万石　毛利壱岐守勝信事

一　尾張犬山　同　十二万石　石川備前守貞清事

巻之六

一　越前小松城主　八万石　青木紀伊守一矩事

一　美濃居陽之内　三万石　原隠岐守勝胤事

一　紀伊新宮城主　二万七千石　堀内安房守氏善事

一　一万五千石　奥田雅楽助貞信事

一　伊勢亀山　同　二万二千石　岡本下野守宗憲事

一　加賀大聖寺　同　六万二千石　山口玄蕃頭正弘事

一　日本古案脱之　一万石　山口右京亮修弘事

一　因幡鳥取　同　五万石　宮部兵部少輔事

一　一万石　垣屋隠岐守事

一　一万五千石　木田播磨守事

一 二万二千石 伊藤左京清賢

一 三万石 清源右京亮

一 一万二千石 粕谷内膳正

一 信濃上田城主 三万八千石 真田安房守昌幸

一 中国十二ヶ国大守 安芸広島城主 百十八万石 毛利右馬頭輝元

一 筑後久留米 同 十一万石 毛利藤四郎秀包

一 筑前 三十二万石 吉川内蔵助広家

一 一万石 赤松上総介則房

一 二万石 服部下総守勝雅

一 二万二千石 武家内膳正行広

一 豊後臼杵城主 三万石 太田飛騨守政之

一 越前丸岡 同 四万六千石 青山伊賀守忠元

一 同東郷 同 廿万石 丹羽備中守長昌

一 二万石 多賀出雲守

一 一万七千石 横山民部少輔

一 一万五千石 松谷織中守

一 八万石 寺西木工頭

一 一万九千石 杉若越前守

一 筑紫上野介茂成事　一万八千石

一 松浦縫殿兵事　一万石

一 黒田[illegible]事　二万石

一 石川掃部助頼明事　一万石

一 別所豊後守吉治事　一万五千石

一 藤懸三河守　一万三千石

一 毛利豊後守　一万石

一 [illegible]武蔵少輔[illegible]事　一万石

一 前田権之助　一万石

文元家格録巻之四

拾弐万石　丹羽加賀守長重

加賀小松城主

長重ハ織田信長之臣丹羽五郎左衛門尉長秀カ男也長秀因信長
の命攻越前維任信長横死後仕秀吉公順若狭越前両国
加賀半国通江二郡後改丹羽羽柴小松長重代ニ至テ子
細有て所領悉没収上加賀國而給ニ而三万石宛
下され文禄四年五月十日加賀小松の城主と成十二万石を
賜り其後関ヶ原之役小松長重ハ忠勤を
[illegible]秀吉公薨後石田乱の時大坂へ[illegible]

慶長六年四月迄　家康公御勘気有て浪人たりしか
然れハ武州江戸芝辺に来り致閑居将軍家へ出頭せらる
慶長八年癸卯三月秀忠公ハ父公上洛ありしか其年
の四月征夷大将軍に任せられ上意にて忽長重を召出し常
陸古渡といふ所にて一万石被下たり長重ハ悔先非同十九
年甲寅冬大坂一戦乃時　秀忠公の軍功抜群故に元和
五己未年一万石の加増有て同八年壬戌又三万石の
加増有て都合奥州棚倉城を賜ふ合而五万石也
寛永四丁卯年又五万石加増にて同国白川城へ移る合都

拾万石也同十四年丁丑閏三月卒ス六十七歳病死其之男
左京大夫光重長続家督同二十年癸未秋同州二本松へ所
替也今末代迄忠勤して其子孫繁昌せり

二万石　豊後府内城主　福原右馬助直高

直高ハ石田三成か妹聟也依之朝鮮軍の時彼地へ赴
石田と心を合せ諸大将の内にて和私の務の言を
聴府に申遣り又一味乃諸将ハ聴召て割に被成候へ
諸大将勝茂毛利行中の面目を失ひ　家康公御
前にて対其せられ直高を其旧據なりけれハ一旦の返

皆ひしく忽ニ逃散せられけり依之江州へ行佐和山城
へ逃居去り縋りニ石田軍揮を揚け附濃州大垣城ニ篭城
為之儀を攻落し彼城本丸ニ忠ら者篭置二の丸ハ秋
月長門守種長ニ相良宮内少輔頼房ニ高橋右近大夫行
長也三の丸ハ熊谷内蔵助垣見和泉守家純木村
惣兵衛ら着備蔵父子都合七千余人ハ籠置ニ縋ニ九
月十五日関ヶ原ニて一戦始り石田以下の西国方悉討
負け敗北ニ及びハ翌十六日松平丹波守康長水野日向
守勝成何も大垣の城へ押向ふ生害の諸将ハ関
ケ原敗北を聞て家中騒動す然ハ高橋右近大夫心を合秋月
ハ扨て密を居せし相良秋月高橋ハ降参を極め
家ニ康長勝成へ申遣スハ福原垣見熊谷木村父子を
討て出へし其忠賞ニ於ては命を助ケへし
一命を助られハ永く 德川殿ニ属し先手を給りけると
軍使を以て申送り丹波守日向守是を然ル上ハ
右の輩を討て首級を差出し合宮ハ不及申相良家臣
相違なく知人 同月十九日木戸へ出しける
返るを二の丸に焼同十八日の早天ニ熊谷木村父

手筈の方ハ兼評定せし事なれハ本道二の丸ハ下条と
後者を攻めて中島右衛門事ハ則ち今然として茂山ふ石屋
頃者二手に分て石見守ハ秋月式部少輔の陣所ニ来り
と兼て用意の旗指物ハ手籠に忍ひて数多しく相
図乃鉄炮を放しけれハ水野松平心得て城中に攻入
急に寄手にかゝり籠に本丸の要害堅く守り福島ハ
速も不通命しけれハ定而防きけれ共一旦ハ敗攻合入先
未だ手に入り哉に西尾豊後守先登の濃州の兼用意
ありけれハ大河の岸を直に加へり右鉄をうしめしと云ハ跡より

何ぞ叶ふへき常陸介ハ先登して福島堅く守りける処へ寄手
既に寄せ来りけれハ西尾ハ程なく城へ先登を以て中にも入
勝ふ者を手柄とし何ぞ軽き罪を犯すに合戦に急
果て終に城を大将の命を用ゐす故に一番乗の命下知
の事なきに間の府へ中しんと書いて福島文を披見し
大ひに驚き因幡守本丸を明渡し豊後守を陳所へ来
而西尾此後　家康公へ右之次第を言上しける処
依田の智謀ふかく其功のおもむき忠義を奪ふ事なく
死罪に処せられ西尾の備も遂に誅せらるゝ事と定め給ふ

清然ハ流罪せられ福原彼地ニ赴き来月迄逗り程と
能登守是世良ニ歎の後本人ニ於てハ嘆之上皆なく
後ニ自害しけり相良秋月二ヶ所ニ罷居しける
ゆへニ其死を知て其家絶して後ニ没収せられしと所
実ハ皆返し帰りなりし

二万石　豊後富来城主　筧和泉守為純

為純ハ朝鮮の目代となりて渡海せしか石田と心を合
福原熊谷垣見の目付と申合諸大将の働きを不申直
讒を訴ゆ諸将憤り慶長四年去伏見ニて城　家康公の御
前ニて対決ありて讒言露顕し思ハ所ニ不首尾ニて改易
江州に閑居しけるか石田乱起しニ江州へ引籠しか　家康公奥
州へ御下向の後ハ石田ニ知らしく石田ニ知らしく来り頼ニ与へ大垣城
ニ籠居して相良秋月等ニ計られ横死せり其子に為純の孫
城より合戦助九兵衛等ハ兵九兵衛大将として大勢籠り城を
守り安に黒田如水軍ハ豊東の諸城を攻落さんと志ら
十二日より是ハ彼地上下の諸城の四方を打囲て攻
具を調候よしなく攻候て城部宗寛是也其上助
九兵衛九兵衛も大剥の皆打死ハ陣[illegible]ニ抱へ防戦して突

おゐて御しと討死に如水の家臣田中與太夫長政は
家臣にて熊谷か居城安岐を攻落し其後豊後
国ニおゐて所々の城を攻落し其上ニ城を攻ニ
あひて篁を陥し日暮をも待たす忍ひ入て
ハ江良新左衛門ハ由緒ある故栗を以てこひ和泉守太
手にて討死し其子又兵衛ハ小倉居田安国寺ニ
仕え毛利ハ降参し其後大将討死し又心を変する
事熊谷次郎ハ居知ても不中津江良兼て城
中へ入右の次第細々と語りける城主此事を忍
とて何か元記して大も助左衛門ハ又兵衛ハ家老も
皆ハ残らす討死し其後ハ城主とも思ひて落行けるハ
今ハ不残御討死しけれとも助左衛門ハ又兵衛も入城をすて
扶亀山ハ城ハ即時に落にけり

八万石　豊後安岐城主　熊谷内蔵助直陳

直陳ハ熊谷次郎直実か末葉にて元来植家の者なり
故秀吉公の馬廻より奉仕せしより度々の軍功を以て
まて取立られ年陥ちて城主となる朝鮮征伐の時諸将
の目付となり帰陣の後毛利

中々對陣すへき此分故逆敵せらる事も右同前ニ年な
まり依和山一郡を恐れなりけり落來る由見届して
加賀与一太垣の城ニ籠りけるか見未村と一同に横
紀伊居城ニハ牧又熊谷外記大将として大勢ニて楯籠
是へも急ぎ入て押寄て寄せ急に攻けれは紀州安治城
ハ東ハ葦海まて打見五三町ハ岩石並々と巖なる
也西ハ岩山也南ハ左乎地ハ北ハ堀深しと云ふ
二ノ丸の天狗と築く乾の方ニ上け(?)れし門櫓の方ハ
右垣之を方ハ大手へ向て土橋を渡り櫓ニハ是も石
垣として甚堅固なりハ大河なり湖湯まてハ堀の様にも
漕寄所ハ柵の岳要害なれハ急田(?)もて攻様もなく遠
まきしても居たる急ぎ攻にも寄し作(?)某右衛門実並
甚強ニ士卒を進て攻寄せ皆ヶ手も大手の門際
迄押寄一時攻ニ乙けれハ城中よりも弓鉄炮を放し
射かけ又ハ突かけ追崩して大将討れたるも
有施死人の上を踏越して攻ける外記も防戦して
士卒を集て中ハ城内を防き後詰まち味方ハ
打て敵ハ引て猶加勢も御座て攻る也思議(?)手

一戦ノ人鋭ハ大勢出ル敵ヘ入テ我モ人モ瞍地ニテ士卒
ヲ助ヘトシテ元面ヲ爲ス者モ同ニ卒ヲ助ル乃
進如キ中ヲ行ノ者ヲ云我ヲ命ヲ惜ニ脱走ヲ謀
ヲ禁ル何ヲ使ニ陥ツニテ懈怠ノ心不出事ナクテ大
勢ノ命ヲ取助ル事ト中ニ於テ鋭ハ陣如ク陣ニ趣ク首ヲ
ヨリヒ中ニ於テハ卒ニ静[illegible]ニテ慢ツヨリ敵ヲ覺テ兵ニ長
トモ己レ後ヲ思フ一出陣ノ内中入ヲ如ク焼ハ卒ヲ
ヲ唱ルヲ汝ヲ已ニ思辞退シテ不由進身ニ在ニ京附シ
手ヲ措テ静先ヲ取陥ヲ聞ニ去如氷拵テ厳ニ

如此彼ノ心底ヲ也切腹ニ至テ及ハ心静ニ至ト成ノ
城中ヲ如ク云シテ其心底者ニテ代義ニ卒ヲ取ニ
如氷ノ不知ニ昔強ハ鋭ハ自殺ニ至テ義人ニテ大将ノ請出モ去ユ
至リ者ニ不残ヲ氷挟ム仕ヘ人従テ何ニ[illegible]ノ主人ト談ル共ニ
敵ヲ伐ル兵モ不知也心静ニ仕置テ[illegible]ニ返答仕候
如此ハ不意ノ命助リ城ヲ置[illegible]ヲ大将ノ軍ニ
トモ如ク情ヲ陥ニ町家ヲ落テ敵城ヲ攻ル又ハ城ニ
積テ化也一退キ敵ハ如氷解一[illegible]シテ或ハ去ル所ヘ
ニテ返却ニ如ク成ハ城ヲ請テ衆議ヲ[illegible]ヲ城代トシ

大将御出陣せられし事　家康公於江戸右之安如水
の御援難え上御感あり御覧遊され為に候者

廿万石　平塚因幡守為廣

為廣は其先一品式部卿葛原親王後胤三浦平太夫為名
也為名の五代目平馬允為高と云三浦介義明の舎弟に
仕相州管原山にて盛綱を討留其勲のこる右都々を相
平功と志て武州平塚の名を二千町を下給て領地へ
移り住居の故に此時より平塚治三浦を改て平塚と号
也し節は三浦家衰微もれは為之を平塚も流浪して諸国

を家とし為當より七代目平塚平太郎為廣ハ美濃に
住ハ小坂長久手の内に参り鍬ふて東物武者を討と
事一勝手と被成候と示之と浅野は右方右近之
家しより先是依而後下因幡守と叙任依て太閤勤を
従励む能ふ大谷刑部の浅知君を尋る所其後右田兆の
時ハ秀頼公の命として石田ふ與し其の味方しけり
なる初は大谷ふ随ひ心を卸きて志鉄し其後諸将心を
變ゆる中に為廣も人刑心ゆくを宛て迄大谷と誠ふ
能を思ふ為右田を初め諸大将ふも平塚か忠鉄なる也

もの故皆悪落失纔味方溜りける者為讃岐守を始め
座興の味方をも尻目白眼大谷方人最期の躰を見もし
其後東西南山内対馬守一豊の備へを望め殺手勝ぃて
退来の中へ一文字に破て入退つ返しつ戦ふ程に纔味方
これけし大勢に打取られ皆討死まてしに平塚一人
ふみ留り如何にも大勢をも事とせす思ひ切の長刀を水車に廻し
薙立て追る平塚元来大力にて長刀の達人なれは飛鳥の如く
戦ふ故追大勢をも只中を突立て廻り平塚勝を争
ふ故さて人馬共に薙立て四方へ逃く長刀のあたるをらの如く
小蔵の紀吾か孫忠とて此も同所にて薙て廻るに其後敵の
後ろを援けと皆々是を望み行けれは時に山内か追臣桜井直
三蔵こそ大剛の者十文字の鑓を持ちて廣小寛にて
かゝる因幡もさるものにて打留んと件の長刀を打ふり桜井か鑓を
打折んとせしか却て打折れたる長刀目釘元より折れて桜井
悦ひ乍ら追詰め大袈裟に切倒し終に首をとりて山内に見せて
誠に名利ある功業莫大のこゝろ者也とて感しけり
家康公へ披露に及ひ公大に程感して御諚ありて平塚
か武勇且生且元祖田家を惜して頼打ちて断絶せん

事ニ而候得共右之品国情ある者ニ御座候ニ付家人
ともあらしめ候ハ紀州亜相頼宣卿ニ不為附也

一万石　美濃　加賀井弥八郎重望

重望ハ父を加賀井駿河守と云、先代より美濃国加賀野
井城之主なり、一万石ニ而其身せらしハ天正十二年尾張
国内府信雄公と羽柴筑前守秀吉公天下を争ひ諸国の
者二ッに分り時加賀井父子ハ信雄公に属し居城ニ楯
籠る、秀吉公加陣被向しハ横合より入へしと其攻被附事
秀吉公突然の攻ニ亡ハ先ぬ加賀井父子攻降参して後

信雄公へ降参と長島城中ニ居候処先陣として其外の諸将
に抜方諸将と先懸致候戦ひ其後信雄公に戻りて又敗
走ニ諸将多く討死し然れハ大ニ敗彼城ハ寛元の要害なる
城なれとも死物狂ひに戦ハ寄手多く討死して城
を落之小野木戦の時ハ長島に籠城せしかハ城主加賀井駿
河守父子ハ加賀の諸将と共に同陣し五月七日一揆寄手の陣
へ夜討なと一方を打破り当列へ出奔してしたり後信雄公
と秀吉公和睦の時天下平治まりしハ秀吉公先年
加賀井父子ハ信の山城ニて又敗方諸将の来らしと防ハ

定めて御帰座を尊敬せしむ感其上累代法例の侍人
なりしを讒対せしに既に絶せん事不便なりとて定以息
孫八郎を召出して美濃国にて一万石を給り秀包を大切に猶以
ける故勤を励しに大谷吉継御用の後は幼君へ粗し忠を励し
主に石田治部少輔三成は大谷と同謀して江戸への使者を
孫八郎に申しつけ石田は密に孫八郎を招て長談して密意を
して謀逆意の謀を秀頼公の仰とて偽り其旨を語り
一味同心の旨を一向に頼みけり孫八郎中々日本国
中の諸侯を聚て中に果を人をも計り密事を次
相語るに及ぶこれらの面目なれ其上亡父大谷刑部の為を哀憐と
は勤学を家人とせし時も皆は云故に其親を重り
は事に今於て懇意深く人竟然るに新今の交りを結以所
にても若皆の御用にたゝん事を存絶はなく一友の為を之
に一命を捨其上に秀頼公への忠節なれば御為は
と申けるに三成猶以然らば秀頼公の御使者として江戸へ下向
して孫の御口上を申すべし家康へ申し入れ然るべし
然らば家康對面せん其時一命を捨て近家康を可
刺殺すべし孫八郎答へて然らば大事の御使を辞退の時

時に初花の御使にて　家康対面せられけれハ申しける讒
頭の時ハ是功の大将なれハ対面ハ不叶なりと云石
田三成ハ何卒智略を出して途中を計ひ了られ(?)
候　家康対面せられハ是非も無く若も通身(?)物ハ有(?)
偏に軽く逃ケ給ふて仰られ(?)の為ハ大国を中与へんと
御誓文の書を被下候(?)然ハ御是を請合(?)随分
智略を廻らし申中与へんと則ニ石を是非に用意し
江戸へ一飛さ(?)下知を江戸へ下り秀頼公より陽案(?)の隠
使ニ下向して蒙り(?)ば　家康公を是ハ不審の使
訊通ふ所を細かに吟味申せよと宣へハ畢竟ハ近臣の人
なれハ委細を吟味へしと云ふ所へ笑井云ふ大事の使口上なれハ
吟味を請られてハ深く迷惑し其の申渡へしと返答せり
家康公ハ度々是又推量なれハ其後氏直(?)の様も返し
孫ハ御ハ対面を出させ待せられ其後御ハ左様の(?)
て程ニ吟味を致され何れも待孫八ハ是を聞ケ返
されハ力不及江戸を立て出で大御(?)紛さぬ其時濱松の城
へ堀尾帯刀吉晴ハ越前府中へ入部なる故ニ則外屋
城を此節に和泉守忠氏ハ堀尾より来時に是ハ泥(?)難

鍛の試みに於て倉蔵も是を伝へ聞て誠に加賀井織部か
瑞尾と倶に行逢ひ名晴是を見て是は何ぞと尋ぬれは
織部は初君の頃保子に目見へ相成り志ふ音瑞尾は俄に財
人右門とは氷魚の如く膝に何と向ひ事の事も出来
へしと名晴云ひて逃てその頃伏あ元服成長見也縮も水野和
泉守果しか倉蔵も是へしと道中かくて云ふ伝居間出居し
尚て藤乃労を晴らし給へしと云ふ加賀井悦ひては頃佐中
まへしと言被は肯水野乃労は業なし扨も是に秋行にて名
佐名晴我と沼羅雛へ発しは是を悦ふ命に添は業長

五年庚子七月九日也佐倉蔵ハ殺到ニ及ひ酒宴含して今
の雛枕の諸公日宮の取は鴻膏を加へて沈在中沈醉
りして朦朧たる時に加賀井傍よりなにからへ不思議にて和
泉守を切殺す名晴是を見て刎眼在にて添え所を切殺し
右そ不敵退下周章て座は總へかくて又瑞尾加賀井か取
合まて細そのへ也に踏込み縮尤鴻膏の添て披露なる外に於る
依て松明蝋燭を取りしてて座中をは見られ和る事も添
織部と切殺して依は其ない瑞尾歿の助を出て上答
一同に名晴に物ていへる名晴是に鴻膏を捧右に脇

莵を抜て大勢打払ひ左右の者を流石に大音上て云けるは
此御亭主にて今夜和泉守殿を弥八郎切て取る故
弥八郎を捕ふ者切て取れと云其時其座の沢木与三郎也
云者云出たりけれは弥八郎は初手より名乗に心ひしと
葉のことく打散し脇差を抜て右の方へ掛りて楽息ふる事
ばったと切りかゝりける時堀尾か加賀井か敵人の喧嘩と
笑て打二庭中へ押入を水野か家人戸を立てゝ不
殺入ける時堀尾か従士侍賞織部町の裏より出て右の庭海
一人とて走る加賀井を傍に路に来て織部煙

に誰と問ふ堀尾茂助也と名乗吉晴殿を指して手負たり
共に退けりとも云て喧嘩の相手を堀尾か織部
時に此所にて退て水野か所に村共
己を除せし和泉守殿を弥八郎に庭に死して場
庭一人道をして夜帯刀早道にて与人御討たれ
其守手を頭取りに継て堀尾か喧嘩の相手
遂に云へは家康公召寄せられ吉晴か
守信濃守を擒へ推問ましし又其後に逆意を
知へきと上様も安堵を仰せ下され其事を捜して候

ばかり干時　泰忠公仰られけるハ信濃守ハ当年より左衛門
ありて道をも不遂当年既に十三歳に成ぬ一段も器量
抜けし給ひハ何とぞ幼年に成人継父ハ逆意に及び子
一味せさるハ罪なき事なからも能登守氏ハ父の罪を仕ふ事を申し
又右京亮ハ　去る頃前々より忠心を尽し事に付て殊に
がく更に重ねて　非常の御頼ハ不当之甚し深く
御隠密の口上を出しにて浅からず頼　左衛門尉何
とて御遺言ハ以て難く思ひ召し候得共後嗣も
しなく今ハ是直ちに早く尋ね上ケ候得ハ　左衛とも

宣ひ給ひける處に池田三左衛門輝政に能よと仰らる
ける一月過ぎて水野が早馬至りて本源八郎か死骸と
打寄り守刀を懐中に一通の書記状を見て之成が遺
御諚にて候とありける源八郎か仰の旨に候と申
右清台同前に仰られ殿人と申し早々加賀井水野氏討
為られ右清源氏討為られ主人加賀井源八郎討れ
不安事とも思ひ又右清より早馬にて申し候
浅野弾正父子高に一所に罷りし給ふ討れ同前之由
かく申し候所也是ハ皆水野か家人に切れ候也

家康公江関白判法請ニ付而勅使并文々書状觀し
而ハ又須日野ニ而御事実否を糺ハ為之ト大ニ上意之
又常ニ力衰ぬとも上使ニ而も武の聯ニ取挙ゝ有ケ様ニ偽申哉
太ニ謀りし節日信濃守取ニ候条ト御入 秀忠公ハ
御攫為ニ候の最前の段ニ思ニ付候ニ御座情を被
為二息ニ能料を恵ニ付家恩顧の者共ニて忘しと感候して
云々 秀忠公ハ又常力ヲ労敷を論能ふりしも感也

拾二万石　伊豫　安国寺恵瓊長老

長老ハ秀吉公ニ寵遇せし一の者ニ成て字ハ瑶甫と云
海蔵流小(?)師禅秘也先ハ芸州安田郡豊(?)長村の農民の
子也十一歳の時洛陽東福寺ニ行て学文せしか生得
利根聡明ニ而ゝ国一僧十歳ニ而出世して長老ニ成る
又も禅寺ニ入て僧侶の棟梁と成る是後生芸州ニ
於て安国寺を建立て帰依の者ニ候せり依天明迄(?)
聖路ニ安国寺の古刹退転の旧庵輪蔵を改観し且
東福寺の諸堂の破壊を修復し又干戈芸術を能く練
也故毛利輝元深く交り厚く信之ニ至
故に安国寺毛利家ハ為ニ依頼是後秀吉公被信ヵ偏

備前備中の事ハ先年及毛利家より所望有て与判之事
此方より被備り宇喜多奉行を定て秀吉政事の脈かの附に
付備中国より備道備後の国芸又芸備の意味知て出雲
石見元来の守兵の備事ハ甚返答に及ぶ之様に相成る所
二付ハ相当不離れ候とも是非なく程は然して已に候
より十二万石迄と給ふるの由様に諸侯共まて付備中に付ける所
安芸中国二紫出合の様ハ何事も存付とい
し秀吉出羅虫の旅も諸侯共まで共より宇喜ともし地様
ハ三室ハ皆以其余大名ハ弐千石三千石甚も亦七百石

三百石程家中の諸士共ハ今浪牢致路頭に及ふ浪人
多くありとも扶持無く大名よりも人馬を扶持し候事
叶ハさる故ハ縦令加様の事もなり候人共は騎雑人数と
而今ハ石見ハ石田三成又紫の兵共も既引て宇喜多の
親しく近付の初毛利輝元を諸ふく付備を以味方と
なりけれハ其外石田か輝元を以て武衛諸将を引付備兵将
と以一味して是ハ衆にて揃ひ二成と共に心を合して実と
申は輝元ハ其子等諸馬七百諸雑兵共に二千余人馬
物具兵粮出しとせし様に相成ぬの大将ハ輝元と見

一ノ手ハ陣中ニ毛利家陣ヲ守ル岩尾石田ト目前ニ敵軍ヲ
不知シテ只如ク東軍利ニハ我国ヲ守ルヘシト然ハ上ヲ見テ猶ニモ
旅ニテ勇士ヲ常ニハ諸公武略ヲ通シテ数シテミルモ
皆ニ戦場ハ動カス事叶シテ唯臨時ニ食ニ肥満シテ兵
者ノ能ク備ニ廉直大胆ヲ吐ク依テ被討時ハ大ニ未遂シ
儀ニ牙顕ハシ士卒ニ旗ヲ大勢ノ数人ヲ乗テ有様只一人
馬ニ乗テ逃出ス見テモ三千人ノ者共ハ其一命ヲモ
不討モ浪々ノ諸長刀ヲ打振リテ主人ノ落延ヲ尋ル
魚名モ不見面白ク只落延ル石田ハ大ニ怒リ軍

使ヲ馳テ味方ノ諸卒ヲ集メ座ノ軍ノ勝負モ不付ニ
何トモ落タリト触レシメ只被下兵モ不入能集ニ
諸ノ寄手ヲ皆兵ニ取テ敗ヲ取ル備未定ニハ唯退散モ
被ル諸軍モ不見志テ藤井ヲ駆テ逃去リ治部
大原ノ奥ヘ落延シタル所ニ手負ヲ思ヒ出ス只治部
一人従ヒテ七条ノ近隣ヘ落テ入ル所ニ思ヒ者ニ被討時退長坂
前九郎粟野長七郎ト云小姓両人ハ治部ニ仕ルニ付其後
中ニ入ルヲ今日ハ日本国ニ顕ハシ討死ノ覚悟シテ
モ不遁我ヲ助ケ給ヘト云テ思ヒ定メテ終ニ生捕レ

殺されし殿は和寧を悲しみし故難に逢ふ人皆是に逢れ
自害ハ了と縁去候者共は猶不用汝に其年に至て我
心底を語り申しまゝしけるの事ぞ去と申
覆に福寿一念行者共是々文字にて成就
然申し風邪打盛挫殺さるゝ事の前に念誦しりて
語られ聖の文御見へ給ひて死ぬ十念列へ参り下
こゝに前の者共語ひ法要に及りけへと云平井長坂
其是とて此人は語ひ若は縁他の庵に至へかり一形絵
刑部し守とも自害せへしお語られて其肉絨に方人

を切其刀安国寺のたへ頼とる右の時に中る二人に打留
とて心静に判遣へて死へり長坂十六歳平井十八歳也
安国寺ハ落行けるが前に伏見にけるまて此時に
陥して夫方鞍馬の月照院へ行て警固を頼しけるに
佐須渡頭をまして不案内思ひ又延むれ安国寺身の
置所なく彼方こなたと迷ひありく洛陽へ出ける或商人
に知られて皆々思ひ語りかたり渡頭に出ハ
其比奥平美作守信昌の父子の家の前へ人を出し数ヶの
為京都に在陣ゆへ其細の事を聞て信昌将ハ

郎右衛門か聟男左衛門に人数を添て
忽に生捕 家康公へ献す。是も十倍人を以謀叛人の
棟梁たる人の首なれは諸人の見懲にせよとて同年
同月十月朔日雑車に載せ大坂伏見洛中洛外近江淀
し三条河原にて首を刎ね梟首なり

・五万石　近江水口城主　長束大蔵大輔正家

正家は従者丹羽長秀の家臣にて長秀か後にて信の㨾者
也と云。正家は算勘の名人其外諸事に於て算術を得る事
世に比なき名なりしに依て日本秀吉郎の為に召出され集り

其術を秘する故に依て家常に此事を申せし事
秀吉公其後長秀に仰ありて預り給ひ五万石
を諸国の検地に識入用の金銀米銭其外の事を貫
かきやうに算術を以て勤しむ信有正家は元来算術の器
也故に其術を以て自由に此の検地を勤し秀吉公其
を感し給ひ後は諸国の年貢諸運上の奉行を給
其外を其時に当て中分に居る所も検地を引し故
算術者也を算術を奉ることに理も亦ある所也所々の職掌
に至るまて其術を見給ひて勇知を深く思召給ひては

秀吉公乃ち肯に付ひ順ふ事を先を以て後に入行
の門に加へられ機を見はからひ官位累りに進みて終に忠勤を
励むより桐紋并に御家紋を賜ひ又家康諸軍勢の先陣を
上方より運送して又其身の働きを考へ給ひし
軍勢に勤められしより家康卿其日数を引て限りを定め
毛利方も是迄川を越たりし其間は武具馬具兵粮迄考
渡海に至らしむ京の筆をも継ぐ城下を始め諸軍勢に
家々の業術工夫神妙なりし感状其上に武列を賜りて林筆
の儀量に正家に武勇智謀を顕はし本陣に於て又朝鮮の

征伐の時に彼国へ渡海ありて忠勤に武名を揚ける也此
軍功は諸将に勝る故其身の名を天下に如何の忠勤をも尽し
故に大名列に賞せられたる大名に渡り秀頼公の忠
臣とし其後石田三成謀叛を起したる時に家康に与し勲功ある
長束なるに一味して家康を退けんとせし時忠功の思を
心得難し　家康公御通りに石田ら謀逆の段
方々を遂一に告来り聞届し尤も勝利を得るに至り勇戦武
なりしかば　家康公御帰陣の後に恩賞を下され石田が
但し本領を賜ひ其後須磨并に此の様に賜ひ十万石　其田領地

依之小寺家来方より亀山城に籠り石田に志を寄せ彼城を
攻落し寛永方にて籠り居り黒田懸思ひにせよと云ひて陣に
西家より定むるも二陣には長岡越中守同少輔惣兵衛親と陳に毛
利右京大夫秀元吉川中江式部少輔安国寺恵瓊長宗我部
勝前田様と加藤横浜民部少輔松浦安太夫筑紫附宇喜多
お知るくく寺気を廻しに太閤小城を奪援し吉川寛
京へ出陣せしも着て更革ニ在せ候詰筆更而後而して
在城へ廻り同刻小山邑に有候小寒中に在て行逢候の節
小林勘解由追て迎出水口の城へ入小原部をして寛宗紛れに

思ふ處石田治部少輔討死致し生捕致し小荷物又跡等悉く
切りて鍋島兵部少輔を始め西家の人数等も逃げ亀城へ
參れは　家康公是を知召て池田三左衛門輝政金森法印
山内長右衛門尉仰付けて池田長吉等を以て両人にて彼城の
四方を固めて候処西家の完全の要害の甲賀に籠る
秀吉公の治世より数年諸役を免じ来たり甲賀伊賀在中の
留守の者共城中へ籠り篠原籠る山中新左衛門尉篠山兵衛
等迄来て池田小笠原亀城に取懸りて落城なさしめ焼払ひ
其後此の城を攻落し軍忠を顕し其後の功名

てこ然者柴田か勝と而小長久手出ら毎々方を立中し
及三好孫七郎大馬を芳ふ人より西から來り堀か打と城を攻へと
手柴し合戦中にも小牧中へ合城中へ參し候か
長吉兄の命を受て城内へ築内にて西家に而軍か出ると
二丸と備中のもの陣入数百立して其細を石川平時長吉
もに内見下し勝政に角田の書より東北の方り出
從小牧に自城へ直向ふに合て攻殺して天下城攻しむ事を守るの
加勢し出すし内藤に籠城者も忠ふに城を渡し
徳川殿勝家し後へ伊勢の東の者を待て中續にて相防

此時子細有し今度内方へ出して歎き防ぎ候へとも
誰従頼みに播範らるや繼合戦の城に籠り候に及
徳川殿に歎對に付あまり其に城を宛渡し出さくれ
陣へて先手代半取りけるをかくに地に掛り一陣に攻めと
城を渡ししれり西家とも法軍を撃つて下り城を
打と山是に首を集めて武将をそろへ其の日の前にて
籠城し池田兄弟向ふて出るもの無之ところ打擲
されにけ被を掌より鄉の兵ども打ち皆負けは負へ
て急ぎ城戸を開き長吉も軍に勝政の陣中へおそいり

盛政は城を拵へ南部へ忍入て後息を絶と無し
正家が接ふし其後旅に出て縁者を頼り節切伏兎角
二元年二七人も生捕られ正家大に後悔あらしに
近江池田の龍口列日野長束正家也よ家臣共悪く誅
戮し正家が首は京都へ送りて三条河原にて梟られ

・二拾五万石　大和郡山城主　増田右衛門尉長盛

長盛ハ性質仁厚にして名誉ハ太閤を木下藤吉郎と
中村尾州より出て未だ知ざる所を改め手柄を立て馬廻りに
取立長盛も生涯無足の者を元の者と共に[illegible]の上にて下されけり

遊び出し二百石を給ハり其後長浜城下に於て家来となり
天正にて信長公横死後織田信雄公と秀吉公と天下を
諍ひ出て天正十二年に於尾州小牧長久手合戦有時増田に
能く組候得共落候て先陣に進て織田家の大将二騎を
打取り誠に時の目を驚かし時より諸人称し増田が
名を知られ秀吉公も今度長盛が高名を称し感状
を給ハる後信雄公と和睦にて天下平均すれば増田に
知行を加へ数百石を以て後々大名の合戦にも戦功を顕し高名の段
[illegible]にて[illegible]城主と成て遂に生涯を送り候

併テ其後ニ来ル（先是浅野長政任太閤ノ附）依テ権威ヲ励マシ小田原合戦
第業朝鮮攻ノ役ニ武勇ヲ振ヒ且又公事裁許ニモ意
趣心易ヲ得其理非ヲ糺スノ才智ニ大閤殊ニ之ヲ称ハ
秀頼公ノ君ニ至テハ其後 家康公ハ幼君ニハ後見ノ故諸
事ニ幼君ノ因為ニ 公一朝仕ヘ御年寄ニ叶フニ依テ石田ヲ
成至急ノ企ヲ別ニ一書ニ増田ヲ始メ諸 家康公ヲ討タン
ハト評定ス其企ハ三ノ謀ノ為ナリ 家康公ハ伏見ヨリ大坂ヘ
登城ノ附浅野弾正長政ハ亦武蔵ヘ赴向ヒ下ラレ且大野
修理治長土方勘兵衛雄久ハ左右ニ之ヲ指揮セシト同
謀寛ニ然ルニ増田ト長束ハ其二ノ石田方ニ与シ此企モ相
談セシカ俄ニ心ヲ翻シテ 家康公ヘ委細ニ密ヲ告ク
家康公ハ伏見ヨリ大坂ヘ御下向有テ其事ヲ告ケ事不慮之
事定リ其日ハ（于時慶長四年己亥九月九日）増田カ難ニ亦止ル是ヨリ先九月七日
登城シテ御趣ニ依テ長政織ニ太方ト称シテ不相合伝大
野土方ハ左右ニ在テ其際ヲ伺フ 公ハ内ニ入テ秀頼
出ヲ易ノ旨ハ如何ナル由ナルニシテ城ニ亦依ノ兵ヲ寄セ間近
寄リテ警衛スレハ石田カ支度大ニ相違セリ其日
家康公秀頼公ノ前ニ出テ御対面有テ之ヲ何カト亦云

三惑てや伏見城にハ家康公を御留守に留め大坂の石田
三成か居城を此ころ佐和山に居しかハ其後又石田まで
居城ハ佐和山ニ移り居しゆへ又西丸へ入御ニ付居住して候
候と諸侯与力大名の如く出仕して御機嫌を伺ふ者
常の如し中にも増田と長束ハ此家の執事を告る由也
諸将に勝まして此輩ハ先ヲ増田長束を西丸ニ大名間
して天下を乗らん勢を得し事比も年石田三成連枝
を企て諸侯大名を語ひ其威勢追々にかハ増田ハ毎ひ仁を
変して石田と一味して　家康公奥州へ御下向なされ

水戸留守居佐野肥前守を追出して其跡ニ毛利輝元と増田
と備前の宇喜多にハ一統して石田方ニ与して討負ハ候
まて此将ニ宮東将立て大坂へ集ゐし安否より長盛大ニ
周章して居城郡山へ逃行らんとて居城を渡して福島
大夫正則并伊左衛門備中守ハ使を掛て小諫防州赤座
福島か安芸を捧げ居たり　家康公にハ今度増田
ハ致達人の様子一人二人の内なれハ其譲状を以て
能ク実子へ東照ハ勤其以為ハ其議也詮議と殊の外思
難を告る忠節にハ何事ハ此度の不審ある御憐にて重て

死生ハ節分らえしこころ武蔵守撫殺さるところ力士佐吉
政長の首を取ふ其頭を一人首の実検として御陣中に首は（に
其死刑を定め首級ある野山へ首を持田大小服し九月
大宮彼か小頭を判髪深く落室を結び念佛
して来月を送りしとぞ

文元栄枯録巻之五

二十万石　肥後宇土城主　小西摂津守行長

行長ハ父を小西清左衛門入道如清と云泉州堺の町人薬種
商賣を以て業とせしか後に代々異国へ渡り居業を営み増
長し薬種年之長男清兵衛行長も父に従ひ往来せし事
あり元義公ハ栄創の時より朝鮮征伐の志を蔵し給ふ
故に小西か数年異国へ渡り案内知りたるを以て父の長男清九
郎を初め召され行長町人ともに武名を知るの志なれハ
太閤後に朝鮮を攻ハ業を先手の大将に出さんと云石

播州室津城の時初ハ弐百石新知を得る行長親も民石
を領行しける然るに秀吉公播州一国領して後ハ時
より天下平均の且朝鮮征伐の頭也殊に水合戦に鍛錬にて一
家も是を承るハ陸もこり名をして専ハ諸藩に聞たり也
去程に秀吉公備中高松陣の時ハ行長先手を出て軍
功ありて後高松陣ありて一万石の感状を得て是より後ハ
位下四国征伐とも又取次に加増有て十万石となり
又摂津守となる其時に宗対馬守義智ハ一女有しを
小西方を智の民部少輔としに秀吉公へ願を達して婿
を結ひ舅となりける其後も功を励て戦功積りける天正十
二年にハ又十万石を加増有て肥後宇土城に居城し秀吉公ハ日
本国中を悉く手に入朝鮮征伐を企られける行長
を先手として大名行長元来異国の様子を知ける事を彼
国の通詞数多語ひ聞とて諸国の便宜を調へ諸大名へ下
知せる事を司る小西ハ元来薬種商人なりと相聞に
義智かれハ朝鮮の王城を攻ハ前後を又敵の前後を
済する事諸将に十倍まさる事ある朝鮮征伐記に見へたり然
ど行長ハ元来性悪き者なりける事に武智にて慢し

て諸将の甚縁を変じ唯己とて人の功をうはへ事を
宗とし候故に諸人漸く治部少輔行長計を不悔
正人を持て世を恨み候ものあり石田三成と膝を入て入魂
せしに逆意を企てそれ諸事の術を相談し行長又川心
仕し其謀を評定しける比石田一武運をかけてより小西か
異見を不用器をかしくなる事多かりし去程に安芸長及
慶長五年九月十二日石田を初小西摂津守兼多以下の諸将濃州
大垣に籠り岐阜城へ加勢を遣し又嶋左近を撰み
川中に渡し軍の人数を出させし処に岐阜忽落城しける

左近ハ利を得さるまゝ味方大勢討死しけれハ一戦を諸
将を招き集め評定しけるに東の勢競ひ上り同八月に岐阜
を落し城加勢の軍追悪く討滅し敵前後へ別れて
岩手に嶋左近ハ安村中村と戦ひ軍利なく敗走し味
方大勢討死し見て味方ハ実を失ひ敵ハ勇みの軍に勝
て其勢ひ盛なり既に味方の其気雲泥の違ひ今の
多勢を以て猶(?)て東の勢と戦ひ利(?)[illegible]中にして
奥追門(?)追ひ味方の急(?)勢を成合て広野(?)まて軍せん
と何(?)々今も中ヒハ宇喜多秀家其外の諸将も皆(?)己と

同しく今日上中には西には五万人ばかり羨ふて居てりしかる人
この評定を一年よりも大に思ひける然に中にも聞て聡き病成
人々の評定を元軍の勝負をしるには西の方十万も戦負にて方
の勝利を得たりは皆東軍の為にとりて日本一方におゐ
も合戦を致さんまにて十万九分の合戦なくて勝負は皆さて
其つきたる長によ味方の負とし云は岐阜軍斗に成りし様躰を
の合戦に味方大勢討るゝも東軍利を得ても大敵を近辺
へ入て負とは不見候敵方の負とも云ふに大津城并後田辺
併勢津の城伏見の城を皆敵乃為なりしも東方勢を

多くしも公兵七万五千三百余人味方の勢は上杉十二万八千
六百余人を催せし敵は其数十倍なりと思はゞ大軍を味方に
挿て岐阜城に忽然して逃去る所なり東人よりは河上の軍を
打ち勝唯今の両所の勢を見て思い勢と戦ふとみるより是は
申し能き出る兵共は定て京の軍を見て此事へ相尋る心能
一戦して万一勝利なき時は大坂の城へ籠籠人数を致し
兵を城にて籠置して敵を不寄して是を致し兵をも得て
出勢を方に勢をもち其後由に於て日見得れ　家康公の
籠中へ仕して城の事をは章の勝利を得ける所に岐阜

度々は戦の智に志して又天利まつは此彼岐阜中納言秀
信は生得愚昏の人なれは勝負を極めんとは上を学ぶ
わかに志して前年家臣とも雲霞なりし諸将の下に従
ひなから此は浮き軍にも世に首を失ひて諸家に是非戦の
智なく俄にも飽りとも極の謀実もなく味方の名聴く
より敵を軍に取りてより将失損益の気なきにて
陣所を退く事後世の誹りとなる西家も軍の後ともに
一方なれは必謀也是故に　徳川殿へは黄金一名陣し
候に未だ人なく過しむより逆旅して一戦もして有なる

は信任事を業とせしに　家康公は生得広智の合戦
の節毎に人を絶え是切を退し軍を作るは指揮する
事也されは今の世に誰か雌雄を争ん而も其気になく
姉川合戦長篠軍長久手小牧両所其外の戦場にして敵
方の大軍を　家康物頭より新発神変奇妙の
謀将也斯る節度ある将の軍として合戦に
小利の所を取て度々討して敵の変化を伺ひ其気を
て御出しけり運を天に任かせ是非味方の名を上るに
分け一身とは　家康公本陣へ御討ちせし一身とは

むかふて陣を取を後ろ見へ不申ハ諸方の様子の無路を見へ
一 其上敵ハ小屋陣取其夜の所へ出張をせぬ時ハ同し事
焼立て其案内致させ軍ハ術ハ多人と云共諸士等
不首尾に夜討の軍と云ハ法指の周迎合て諸手の道
合わせ軍の術ニて夜討の際ハ首尾よけれハ是ハ夫より
半路ハ目ニ本陣ニ合わせて天下分目の合戦成に似たる
も利口を以て左右へ離れして小勢ハ是見へ不申候ハヽ逃走る故
の浮足也其中にて三歳ハ分りて少面取の所当ニ而見たれは
一度に入ハ味方の気を中に敵へ心を取る其大将もよく覚

御説ハ唯今の様子を敵方へ知られ事必定也依て浮備さ
然ハ夜討せハ印して敵の備とかり味方兵千騎ならん
其所より夜討して敵ニ勝利を得たる後は新軍仕
思ひ立して唯速ニ当所を退て味方の大将心を合一
致す功を立んとするに小勢ハ陣を取囲み長く手もとて中に夜
討の術あるの反心ある人ハ名も角も心得させ当所を退
て写へ帰り追付入事ハ急ぎ給ひて軍の習一つとも
退きハ時の気も気は如しと云り彼早く後に味方の
勢ニても乗せ支へ行して方ニ焼とも見て当る術にてたり依

はしく防戦に打張けるか陣所を退は敗軍に等
しき故て味方諸力を落し敵は弥武して猶勇也し
心地して権威を振ひて当其上弥所を引れなは味方の
軍勢ししとて心を変まるか如へ陣を退て物なは
は重く軍まるまて味方必て討負へし諸将是に不兼り
先陣の援兵ならずし於し信長大に腹を立席を蹴て
立給しかは左右に驚ちるに預い心を翻し味方の諸
人と鋭は何卒軍にあて武勇備神の如くなる上は百万騎
の勢なりとも必軍は負る事無しと心強くて苦しからぬ人味

方に一人も出さりしとかや後に思召し已に陳所へ帰り給ひ 信長 方に
あら狙を存由に　家康公動陣へ御越有て甲冑の君を
見も頼く雑説を云しめ所を中とらいし語に始也と云を 以て信田を始
諸将悉く雑説を信し九月十四日夜物も不取敢酉刻に
陣を退て牧田の宮道を経て罷て東へ引退く折節雨降
大雨なれは諸軍大に迷惑して川々に水付て高水故
土地も迷ふて云けるに味方の諸将悉く引退く由を告
けれは信長是に不信用して事也有へきと云者の候り
けるへ引退は我方へも知らせ一統告有へきと兼て
不思議なりしか退て如くして告来りしは不思議に思召し渥

一統し馬ニ而諸大名の陣々を廻り是を以て周章して
是ニて兵粮等勿論不及云ゟ鉄炮旗長刀甲冑ニ至迄捨て
小荷駄馬ニ小西兄弟ニ具足を捨我陣より人夫五百人を
召件の兵粮を心静ニ拾集め馬ニ負せ我陣を返て
兵粮を取所ハ別諸将の手へ人を遣して本陣ニ
推参して兵粮共ニ営東留ゟ拾ひ君ゟ兵粮の批判せしむ
只惜く残る所ハ行長拾ひ集め所持し如何閑明
小て方々兵粮是迄通り其後件の兵粮を買取候の儀
情の趣ニより小池村の間之道筋ニ而不思議ニ候て

渡し給ふ去程ニ行長ハ兵粮ニ中々ゟ取りて勝利ども小西
行長ハ右の通り一味して大兒也へ只賭させ給ひしく含右
田を経ハ勝負て兵粮を遣し諸人の難を防くゟ今に
語りて小西是程の計しと云ふ皆人思ひ者被行ハ今更不足
頼ゟ兵粮の軍功を世に知りて返しても残念の付及處
胡の軍勢ハ二万余もし諸人不知ゟを追ニ討死し
者ども後陣ニ上る与も兵粮ニ依て戦まし中々其
も今ハ何分て勝年来の恩ゟゟ今一度不戦
玄枢ゟゟ中ニ而小西大将實ニ情しき心底なり

從ハ宇喜多の備宇喜多ニ組迄取崩して其後ニ方の
備を定め右ハ相宮右衛門ニ成津守康政筒井伊賀守大輔
羽柴家小西摂津守行長ハ宮東野の鉄炮有手を定て宮の
前川の西長に向ふて備へけり又宇喜多秀家ハ同所に
陣大谷吉継糸織為右廣戸田武蔵守重政同所ニ室曲ニ
津田長門守ニ陣成ハ右京鍵を引廻し吾川とお渡り宮
京都山野に押向ひ西山の山野藤小西坂を左に
見なし是藤に向ひ陣立て備東西者の左陣に
備前ハ大将宇喜多秀家之　家康公の御旗本ハ霧谷に備

十六日に備を定めて午時ニ福島正則ハ鉄炮八百余挺ニ而
石田を組合有と先矢合の議にて石田方え一斉に鉄炮
鉋を一度に放ち諸ニ打風合数を鳴し黒煙を揚けれハ
東西の鯨波を合せ同西国勢も黒煙を揚て軍の初まる
福島父子二人旗下より南に向ひて先鉄炮の迫合ありて長
柄を揃へて讒を備へて突懸りしかハ石田ニ陣に突入
鎗合午時小西行長打出て鎗を長柄を突立てかゝり見へ
二千宮東ニ方細川越中守加藤左馬助黒田甲斐守等先合
て食を取て又藤国ニ方佐渡守京極同秀家宇喜多勢

敵も寄来り小競として桃井か行長にこそ忠と云名馬
に乗て手の者に眼合して敵には大勢味方は小勢大将
の軍しては利有まし敗軍も月風かなふ大将に逢
て討てとも不知ありて池見より家原は汁板を渡
何りの者後宮に敵の兵を聞て軍に味方勝者
を出人数を置て揚旗本の先陣に一同に馬を入て追
の軍も前一軍に続を乱して石塔か横合をして討とめ来
旗を揚て御馬をとゝめられ旗本の先陣十六騎の先
手も深の様なと一面に掛へ馬の案内を居けるに並て突

懸り石塔小笠原下皆板も四方へ崩て作州山の名作皆
路は風りに落て行人深谷へ落てく死をる所に右衛門佐は造
空小笠原とて不心戦りくらし諸軍と者板より作吹
山の東都芳郡に月北条の寄所に被陣へ馬を皆息
張ましくらは坂へ出無行人又薩埵へ出落行へ但船越へ出頭
らへと独に小山業をもて雑兵離散せしも長尾弟教士と
下人も等不思割覚味方にはお分もなく落人に着を被
しも求には被退所へを横を放て行長連合不見追
と忠は切て佐倍中て戦如比先頭して運を究めたり

此度今ノ反石田と云る若者にて熊野屋ゑとて心強軍も
其後中トにて取軍なる事ノ召ば隆く候仰て謀今ハ力を乞
是御人の給ニ此度行長ゟ手に入る也一夜討なりて運究
寒ニて見かね脇病か極めの謀を以て兎角も可致候て
あつまりて軍ヲ自由なり自害せんと思ひ居しに永く残
耶蘇宗門と成し一ツ人ニて信心せり天帝（デイウス）の法として
自是ヲ守ル害ある事とて深憶し嫌ふに也不捨ニ咎め追
行長と涼し縁し貴里ゟ乃志筋なる返祝に命
是非候ニ施まるる　徳川殿へ注進を申し給ひて致進

人の後ち人取まて一所へ寄合て搦捕へしと云ふ僧を
ハ寛る懐に入也ハ撫順も不数て沈む僧徒の身となりて
何を数も如人を雅行し召付け寺江参居て可伺て
其を兎角を致ハ挨拶まて是に寺に参也ハ林蔵主と
云如此ゟ小西の被守に来を知り九月十九日
家康公江州八幡山の陣所に来り竹中丹後守を召ハ
新人まてハ小西摂津守を山中の細覚寺に隠れ居人数
を向ハ悪僧素召仕搦捕へしと申上る　内府公悦喜ハ
引彼僧に竹中丹後守を以て源兵衛れ家人大勢に

林蔵を始手ヘ掛り同宿の中悪僧共六人付て件の宅
へ行に其討手の案内にて門前に徒ひて林蔵ハ悪僧共を
打連小西か宿所へ庭踊へ出て見たる所に小西ハ前後
にて其外悪僧共ハ縁の側に小西を左右より道具を
後ろより押入て搦捕んとせしに小西目を覚し悪僧共人
見て押へ膝の下へ押込て指殺さんとしけれとも起上
太刀刀ハ隠させたり暗闇にて押殺さんとせし所を強く
四人前後左右より寄り金剛力を出しけれ共終に小西
小西大力なれとも抜刀し押へ二人を踏殺し其外の者に

疵負せしか竹中重門大勢にて押へ強て生捕島にて
八幡山へ向け数出ける家康公の厳命にて竹長兵衛の組の
膂強なりとも安ならし搦捕事抜群の手柄なりとて竹中より
小西か苦しむ忠光の刀ハ忠光の脇差ハ竹中の庄の家康公へと
差上猶下四郎ハ林蔵ヘ賜りて許人褒美に
として黄金十枚手下大勢にして同日此事由気の遣織
筆よりも頼て押入事中信長を殺し黄金其外什物を
悉く資を為ふ小西十月朔日石田安国寺同三所ニ雑車
小舟せらて洛中洛外大坂を引渡し其後三条

河原にて兵衛首

拾一万九千二百四拾七石　筑後柳川城主　立花左近将監宗茂

宗茂ハ其先大織冠鎌足公より数代藤原の姓を帰す
より其末孫藤原鎌足生不比等 淡海公 不比等生房前 内大臣
房前生真楯 大納言内麿 生冬嗣良房基経忠平師輔兼家道長
長家忠家俊忠光家光能迄十五代也光能生親能 武蔵守 大江広元
因幡守 共仕鎌倉三代 頼朝頼家実朝 執権職也 広元ハ毛利の祖也其弟能秀或石清水の別當なり 親能男子
八人其一秀時 従四位下 能直 大友一法師 親実 巌将周防守 師員 大膳大夫 師俊 二比 親家
門司陸奥守 仲能 田村刑部大夫 親忠 筑井左馬大夫 也大友一法師能直也其男女十六人親秀

利根二郎後叙大炊助肥後守後二字出仕鎌倉将軍頼経公宝治二年戊申三年 能秀 大夫五郎従 朝廷建保元癸酉年八月二戊申年叙従五位下肥後守賜肥後国詫摩郡山本郡
安貞建長二壬戌年六十六歳にて病死せし詫磨氏の祖なり 十一男義廣 立花左近将監 是立花氏祖也是故に
立花家ハ大友氏より出る也義廣より親房親貞親孝親忠親
光親氏親宗親貞親時親弘親定親忠親盛四親国迄十五代也
親国生鑑本 アキ 吉左近将監 鑑連生道雪 左近将監大友左衛門督義鎮の一字を賜る 天正六戊寅十一
月十二日於日向国新納院高城大友与島津合戦の時大友氏加勢
而て討死後次男鑑種 三河守摘七郎三河守秋種養子也後筑前岩屋城主なり天正十四丙戌七月廿七日島津と戦ひ三臣共に一所に討死後
次女 大友左衛門督義鎮室也 後鑑種生統虎 立花左近将監 是ハ戸次伯耆守鑑連入道
道雪の養子となり筑後立花城主也後改宗茂秀吉公に属し

て柳川城主十三万石余を領す天正十五年に秀吉公に従ひ
同二十年より文禄元年の朝鮮出陣の時も宗茂軍労多く
五百余騎を率ゐて彼地へ渡海し戦功抜群なりしかは太閤
別て是を見て武勇を感し給ひ程なく帰陣ありて太閤薨去
の後秀頼幼少にて天下の政務を石田逆心を企て初君の
命と称して諸大名を判して書を遣はしける一書を遣はし古
大谷刑部少輔吉継と談して秀頼の為に出陣せんとそ
宗茂は其頃京極に居たりしか西国方に属し上方中より近江へ
実東方に属して大津城に籠る京極宰相高次の城に取かゝる
攻落さんとて大津城へ押寄せ攻撃の術を尽くしけれは城落其
より関ヶ原へ駆付んとせしに早や九月十五日に同所にて合戦
せしに関ヶ原にて一戦初り石田方敗北して其合戦に
兵は合戦に及はすして事済けれは不得止残兵を以
柳川へ帰て京極の合戦の事秀秋勢を取て加勢
其後立花の家を攻んとて京都より下り本郷に陣を取其頃秀
秋の父木下肥後守家定は大坂にて大閤北政所を守護しけるか大坂
中の事に取扱ひ宗茂を懐柔せんと以て家臣を遣し和睦を
依て宗茂も承諾して秀秋に属して本領を安堵すへく

其内坂毛利へ重臣かれハ毛の所業ハ日記ハ貴殿今に
輝元ハ家来唯今大坂へ計く思ひ候はゞ大坂城ハ
以ての外の乱にてハ大坂より城を明渡し申す
家康公驚き返りせしハ所々御家の業之勢多く候間
家康公ハ番所ハ館まて申寄り大坂へハ城中の由大坂の役
風と某も此間の以外と被思召ハ入海と承り候へ
あまりハ数付用事有之候より申中候へハ城ハ一と返答
てつゝ迄も国の候処ハ之在世ハ所務を言語絶
然故一人も不残世を忍ハ右の致方ハ之在所に入給ひ

其家へ逃込候ハ伝兵衛ハ孫右衛門坂大坂へ下り天満橋
小ハ之家臣共も帰参候せ申とて毛利輝元側の
長盛の方へ参し来て橋迄来る所へ右と申す籠城志
て一戦に及ひ其中迄も返入申し其後ハ跡寄ハ家来能と
相談仕り候より中へ入と返答にて家来ハ大小之脇差し業
目打して城中へ入ゟ輝元へ対面し大津城を攻落し
諸列へ向ふへと攻勝ハ東之もの共籠城と中にて一戦相り
味方いまた付候て候へハ先の事ハ口惜き次第
ニ而唯今ハ城へ関東勢をも城を守て某ハ

長陣なれは合を限りに戦ひて京の和睦を申入て味方討
負して軍兵退散すれは当家南城を始和山及諸国の城を堅め
ければ小鎮兵粮貯東勢に攻候はば銭に候ありて早く軍の
手配儀え出し下して大名勝ちて勅により和議元定て悦ひて
しかるに君臣皆かくて扱にして此事様に議定候ておもて
の大勢にて東兵の小勢に向ひて攻めかくる敵方一勢にあり
味方は先勢の十八日に討死けれは手筋なる味方の軍兵総勢
万騎にて競ひ進まむと出兵に多人数集付にて給はり和議元は
後藤又兵衛も西丸を定めて渡して本陣へ移りて其後は

後藤又兵衛は先年より当家に出頭せし人にて後に勝
病なりし人なるに此度の御陣にも一陣せられ且又御門の内
談判の石田と大坂の城を守る内に退出して将軍は
流され入て家康は城中に人を遣わして此時勝負は内
中陸奥守宗春の家臣に人質を出して大坂城内に出し申
家康は城を落して出陣し川口迄出て将軍は討取て大
坂に一日逗留せり然る所将軍の家臣は方々を廻して
落行し只今其一騎に付て見れは此方の新手を出て捕え
の兵部卿の浪人を討取候具足を剥取恩賞に預り

ひとへに彼是を遁て墓所を東征西向にして打破り漸家
列摂津に至り味方若は敗れ勿ち独り饗應してかくて
ハ皆々腹を催しけむ由京都より中も大坂へさして注進
す東征に對面有て戦場の事細々尋問東征から会津攻の
々まではしまり殊に味方云甲斐なくも負たる由を諸将おのおのに
おいて出陣しての宋幹後に着して安第ちて到合吉秀秋
毛利秀元吉川廣家脇坂小川並に座に悪しく裏切して又
徳を見捨て小西行長石田を掃て福嶋已下の大勢と火
花を散して戦ふに家康自身を先の行長を追崩

さる平塚大谷戸田の三将力戦有て討死然に今宮脇坂小川
朽木毛利なども裏切して東征勢家康并に討て掛る故
忽に逃散してけり秘書松平忠吉井伊直政等其所にて
戦ふに見て東西の大勢横合に入て戦ふに依味方打負て敗れ
して東征道ひらかりしを東家諸将も力戦して討死せ
し道筋に荒口の敵を追払ひ扨して敵を押分を見て
ならひて返しても同じく今宮の信二手勢に及びて
大坂へ赴きて毛利輝元増田長盛等しも一所に籠りて其
を引き心能一戦して今一度の勝負を望みて且東家の常軍

小山兎の合戦あらく負なハ亦残兵ともけ腹切んとするを
嗤て給ハゝ宗茂答て誠に潔き亦御勇士あらんや誰
とも称せぬハなしと感しける是ゟ天下の心應して関前殺兄
迄も蒙元を動しけるか背剣　家康公薩摩を為して両
九州宗源しけり命を継んと返答ありし誠と勝ち将か程の人なれハ
安堵ありけるに薩摩ハ何地云出て云義弘かくて能ハ及ふ
なりしかとも否と申されけれハ是ハ怯ひ中らんかれは後諸奥宮
秀頼大坂に於り是を持され共中老に此段をも被下方便を
以宗茂何も舟下りと云宗茂云奥州の家臣ハ其庭に

盗むしハ川の宗を立てらハ彼国より渡をつけしと云申け
れハ義弘不斜悦ひ早に川尻行向ひ彼国家を請ませて
義弘か申ハ今ハ本国へ下向せん是迄も薩摩へ来り給へ相
共に申合候一戦を遂んと云宗茂答云亦志満足給ひとて
へて天下の諸侯も更に軍にて勝利なりと雖も元亀薩摩へ
趣きし者村なりハ宗茂まて深発人に無方ならて其の事不
なき様に薩摩迄迯下り義弘を頼しけり彼子ハ謀戦せ
られしと後代迄人口の翻に送ん事口惜次第也其ハ
居城柳川へ立帰り討手向ハ矢一所に討死して腹切ん

と談合ありと云へ共家弘も思ふ旨ありしかは従家弘は佐賀へ
参りて職しとて鷹列へ到たりし家臣も籠城ありける居城へ
帰りけれは一向必死の用意して諸方の橋を引毀て焼捨
龍抗逆の家来結城しけれは其後鍋島直茂人数を以て懸り
此時肥後隈本城主加藤清正は柳川城へ攻使者を遣はされ
其の家臣も其長此也其分は　徳川殿へ未知勝負してと子孫
の繁栄を見候へ給ひ候て清正迄まゐ時下申と頼み
遣はれは家臣なり仍而親族へ御本丸を迄り無き
故に其の端緒勝家は　徳川殿へ降参し城を渡候

以前の事共を言ひて佐賀城を云々此城は向ふより開
城候云々より比其中何れ也行に彼ら向ふを思ふ者に一戦
不相及城を開渡す人事云々以て是れは一戦を望ん
也云々也底家は諸家にも彼を云勝負と等々一戦の談合
と見物とて評議候て端緒に一戦しと其後は勝負
小藩にて思ふ城を開き清正へ下渡す事御安堵なりしと
對候事に心を忍びて返答せり清正は家臣の心底を
感して見物の用意せりと云々小端緒従清勝負には不及
先祖の家を相続して此返其石田方の

而ニハ黄落して　家康公ハ思ひ立始の軍ぞかしと心強
く羽州ニ隆国柳川城主立花宗茂籠城しけるを多くの大小
将に彼城を攻落して軍功を世に見せんと然るを加藤主計頭柳
川表へ向ひて軍勢二万余騎にて肥後国八の浣へ差遣
けるに黒田如水も豊前国より發向して山川に到りけり此
由宗茂聞給ひて家子良臣を集め申けるハ既に清正ハ大
軍を引率して八の浣迄寄来る由也然は此城に楯籠軍せん
ハ云申出へけれとも途中へ出向ひて戦ふて一池合の軍
あるべし況んや見苦しき仕合なりと評定有

于時立花三左衛門小野和泉同様に申けるハ如何様ニ大勢にて
寄来るとも此城に楯籠軍せんハ可なれとも一端出
城を致し途中へ出て雌雄を決し勝負を致し候の利勝を見
斗候度へ是非中ニ先人の手本自分如法にて人事ハ不恐れ各
代に残し是非の勝負ハ致し申度と申けれハ宗茂其
旨に見遠く存す是非中しと額に合せて宗茂中
同じく此所にて池田撫将を諸勢と勝負致しけると申揃て奥へ
入けるに立花三左衛門小野和泉立花三左衛門同様申けるハ
宗茂の名代として軍勢を引て軍勢僅か千余人と

川を渡して十月十日上杉衆ハ於長尾政景瑞將の二万餘騎に
對まへさせけるハ不足備之旗の軍兵皆ハ彼前に備置之
て瑞將の勢を俥返先陣を追掃ひて手勢人二千斗
にし一番ハ前を討て掛り一手ハ備を払うて瑞將勢之
色を見て信玄の小勢と見侮り只一揉に攻破へしと備押出
之援に急り五百余人を先出して我討死へしと章に乗り之旗
の軍兵ハ元来小勢なりけれハ皆討死して只かけ出奔り
跡扱千変万化して戦ふ程に瑞將七度まで後蔵(?)兵衛(?)
瑞將之未(?)の半ハ大勢を左右より攻横合に討して入組兵息と
跡被りて之旗勢ともに取渡し合て戦しか大勢の新手を
揉破も軍招之旗二度まて討死に小勢を和泉口陽さし事ゆ兵
自ら敵陣へ突て入化面目へ当り大勢を仕立て戦せしか
然干の大敵に取りハ痛手負て川退し付附瑞將七度まで
も痛手負て川退て見てハ之旗の二陣勢五百余人瑞將
勢の左右より二手へ分て討織り散々に戦ひけれハ瑞
將の二万餘騎必死の討手に急き乱れ崩れしか
も後陣より前へ出て右往左往に逃走けり之旗勢手早
勢して攻敵を払うて戦しかハ瑞將の軍兵大に悩み付て兵

又大将は鍋嶋を先として川入なりし時鍋嶋の兵負
人数を以て之に追討せしめて不及志して諸軍勢を招き集め
柳川に寄りける清正は使を立て見物せしめ旗を軍中に数
しけるに和田伝中を使として是非の武者の御手に属し
宗茂を招き則和田に対面して不変約の見物様に入れ之は
是の城を渡しける間と雖も和城しけりなれに和田清蔵
と清正なり清正の下知して自の家に御意を捧へ
宗茂を入て柱を食寄して其外宗茂の家士を一人も不
残清正預りて其後　家康公は宗茂の勝氏と合戦して大

坂より追帰て其後城を渡せし宗茂其外家士残り
其中に不敵也しと雖も流を振り木の恩を忘れ　家康公も
宗茂の事御聞き深く御感し給ひ後に上洛あるべき
由にて忠功の免を蒙りければ清正に斜ならず宗茂を仰ひ
是にて上洛しけるの　家康公宗茂に御対面ありて旧領の上
御の上総奥州棚倉一万石賜りぬ宗茂謹而悦ひ是を領
清正の下に挿物也而宗茂恩謝言々に限れなしといへ尤も
其後棚倉へ移り而勤まことに大坂冬夏の御陣に軍功を
於て終に元和六年庚申八月九日如願旧領（筑後柳川城十一万九千六百四十七石之〇一統）

小十三万二千二百石と云又右衛門殿は二十一年…柳川城…
此時宗対馬守義成…致し

同九年壬申年十二月廿六日　秀忠公より嫡子熊千代御目見え

并ニ御諱一字被下叙従四位下侍従左近将監忠

義寛永十四年七月肥前天草有馬治部等右利支丹一揆

起り刻宗義成父子長崎へ被指越同く彼所ニ向ひ一揆

乱を抽候様ニ相守寛永十五年二月廿八日落城候同年宗義

致仕対馬守義成家督　宗義剃髪号三決　同十八年辛巳正月朔日対馬守

従四位侍従同十九年壬午年十二月廿六日左近衛将監家督

入道三決卒候正保四丁亥年六月四日肥前国長崎…

渡海ホルトカルの国より唐船二艘渡海候条伺ニ付九州の諸

将彼表ニ参会して彼船警固し候付右衛門督光之は八

百七十余人を引率し同六日当… 同九日ハ　船数二千六艘　其船二

隔の内ニ…船中…

[illegible]

度右衛門督…[illegible]…上聞ニ達し…

右衛門佐…より連状をもって明暦三丁酉十二月廿九日叙従四位侍従万治

二己亥正月…寛文四甲辰五月廿六日致仕　剃髪して号…

長子右近衛…家督同年十二月廿八日叙従四位侍従

下候処延宝三乙卯年九月十九日入道好斎卒同四丙辰
年十二月十七日摂蔵改危津守今ハ大勤也と云候

六万石　　豊前小倉城主　毛利壱岐守勝信

勝信ハ三歳より心を合瞻子豊臣家ニ志ニ籠城し関東
方の諸将と戦ふ予時同国中津城主黒田甲斐守孝高と
黒田方故小倉を攻取ニ寛ら取ける孝高来れハ毛利
父子黒田ニ降参し十月三日小倉を落上列八郎し大坂籠の
時ニ籠城して其後ハ其植正の預ニ佳且後殉死せし
となり

十二万石　　美濃大垣城主　石川備後守貞清

貞清ハ三歳より一味なりて籠城候て濃州府中城主中村
一学一忠伯父光家一党を共ニ籠り彼城へ押寄守城を攻
福島正則加藤の大将寛長ハ寄て改ハ石川と共来勝ニ於も
家老門田を攻て於ハ石田か方ニ於て戦とも石
城ハ龍門の勝小改早城を攻落し
勝ち降参し城をして渡し　　徳川殿ニ上洛也と於
安藤也中ニ入んと云ける石川殿へ返答し九月十四日城を出
京都ノ郡ニ出て説安宅ニ於ハ其外好心事の瑞洗院ニ居長

旁を軽く門通して十月廿一日大坂へ来り池田輝政の陣へ到り
様々に陳謝候池田則此事を承諾其中に家康公へ南石
紫ハ其二の石田方に与して籠城なとして人質を出し敵對せしとなれ
共ハ其罪を深く謝し實ハ本心にあらさりしと悔を詠
候せり其上池田ハ姫路拠點止石川ニ命ハ輝政ニ帰り上京
の事を御免許あるへきと強く請ハハ池田も詫候て石川今
ハ其方の地にて遂て判断して家康と談して京都へ上り町
人となりて紀伊を家長十八歳也其年十二月廿日家康公を頼
設有御目見して家人となりて扶持を賜ふ

文元榮枯派巻之六

北方石　越前小松城主　青木紀伊守一矩

一矩ハ岸田と同じ味して太平家人居城ニ籠り東西方の諸将ハ
敵たり其府前田肥前守利長ハ東方家人として出陣し北国筋石
田方悪くて攻落し其後大谷刑部少輔吉隆北国の敵を退治と
志して大坂より諸大将を従へ居城敦賀へ向ふ其年ハ一矩一番に軍
使を以て前田利長大軍を以て率して大聖寺を攻へと觸し
青木居城加賀馬首して木越より発して北国筋の味方悪利
長為ニ攻落さるへしと思ひ大谷驚き八月二日の出陣ニ

数万にて勝負の府に陣を置事に依て五日ありて高
の城を攻べしとて諍論所詮無肴来又早馬を打せ利長へ
胡大聖寺の城へ押寄て三日時山口玄蕃を攻殺所おゐて小松の
丹羽陣所へ押通りける所に丹羽も籠城致仕し者に依て後へ
大谷二千余騎にて小松を出て北国利長の居城金沢へ罷通る
丹羽大谷
讃と見
此時宥免ありて大谷と浅井大谷早速上方へ趣又
其後北の丹羽も籠城せしが上方勢合戦雄久
来り種々諫言して扱強をして利長居城を渡所
紀伊守は三の丸を明て蒙其外隣所其後利長上洛

して内府公へ謁見の時一統之落着一属家の御事にてござ候
依之肥前守右馬助に家督を譲り我身は一ツにて紀伊守所
ともはずしてある世に付き肥前右馬助は流浪して居たりしか
遂に末路して右馬の佐か罪を免されけり
二万七千石　紀伊新宮城主　堀内安房守氏善
氏善は織田信長公之の者也明智光秀逆心の時居城より
山崎へ出向ひ太閤殿ひ光秀を討し君恩を報候其後
慶長五年ひ七千石加増を給ふ　初二万石　加増有しに居城之
小備籠も海路方来り討前へ出て籠

城は形の如くに築き家なとも可有候へとも此頃は関東軍勢
にて其物もなく大坂城をも押落され候敵人共落聴きて敵は
此度は何れ落行様にて只今思ひ心静かにかへり思案
而後は速く退城しけり中せに来年よりは一戦の勝負入馬を留めて
逃行候へは其以来所知もなかりける

一 二万石　　三河国岩崎城主也　前原隠岐守勝胤

勝胤は信州之城に一様志にて出羽之ノ律に城を構へ成時武勇を振ひ
其々家は何かと色々に関ヶ原にて来ル年ゟ西国方へ落
行候へとも九月晦日に敵流に敵人生捕られ　門前にて討たれ候故

十月朔日首を刎られ三条河原に懸られけり

一 一万石　　奥田雅楽助貞信

貞信は石川伊賀守貞清の末也若年より秀吉公に仕へ
仕へ出世して叶ひ故奥田氏を嫡ふ一万石を領す是故大
谷刑部少輔の後秀頼公へ出世有之石田に与して大谷吉継
北国退治に発向して前田利長大聖寺城を攻落し后備へ越前
へ帰りしを大谷見物大聖寺を立返し貞信と笠置に加判
の説を押させける上方の軍勢敗しとて大谷上洛せし時
て貞信利長に降参し城を開渡して京都へ赴き石川

宗休と云し町人に成しか宗休死去致し候後利長様御意
て召抱候も不苦旨被仰家人と成其末葉奥田八郎左衛門と云々

二万六千石　伊勢亀山城主　岡本下野守宗憲

宗憲ハ石田ニ与して心を合せ関東方の敵当来ハ此処と
て防き留んと亀城頑張ニ罷り京師ニ上りしニ亀城之人数
ちしと家人共申しけるを宗憲ハ不用罷り京ニ上りても大坂紀
和山思惑ニ之ニ読事の体を見て大勢打ハ能利運ニ在て
ことかも当年不居士卒を励し亀城を預かり池田輝
政金森長近等来り攻城中ハ脆く不思為石田組宗存

多賀津山西大谷以下悉討死し其中ニ捕へ居宗路篠原
ハ何故其下ニ籠城ありし哉速に城を渡し其身は陣へ下
来候ハ徳川殿へ申達し安堵させ可候と申送る宗
憲謀計ならんと不知心入候得は　徳川殿御前へ云ハ
其下ハ兄弟と共に成殺入ルと思ひ城を開渡し輝政の
陣へ来り輝政其身ハ前ニ出し事なれハ別城へ家人
いらせ因為召抱家人ハ鉄砲を打城より宗憲没落ニ
其も珍方ニて大将も士卒も心を不何因ともなく落行

四万二千石　加賀大聖寺城主　山口玄蕃頭正弘

正弘ハ周防也又大内介一族也義隆滅亡已後正弘ハ秀吉公に
仕へ忠勤を励し故に大聖寺之城今者秀秋公の後見ニ成
往年秀忠勤を云秀秋不行跡なるにて正弘ヶ諫を不用
故に正弘ハ後見して益なしとて暇を乞し大谷の
旗本へ属し越前ニ住城主と成其後大聖寺城主と成正弘父子前
田利長と戦ひ無双の戦死なり　慶長五庚子八月三日前田
肥前守利長加州大守北陸之ハ山口正弘父子を討んとて大軍を率し
大聖寺ニ押寄利長ハ山下より橋の南に陣を取先手ハ大聖寺の
一乱入然ニ時利長未知有るやうにて何の兵具に先手の内より

御山宮山下より大目鉄炮を打掛彼城を攻城の上より是ハ
名に有て攻よとて陣を取る又山口正弘ハ一族郎党共と
百集候所にかて攻戦也城に浪人共多く鉄炮を浪ふとも
人数多く大事をとり門を防様なり然し農工商の雑人
追散当城を落さんと思ひ籠城させ彼等共に心を合せ励く
城中より右様時ハ討る皆戦死せんと申ける時之者も
正弘中より何も此時を以て討死と思ひ城中一手にて
合戦し心能死んと云正弘又云加様ハ大軍と戦ふに卒
今又城ハ不動物を唯籠城なくて我々も敵を防き御内

其色見候して討て出追散事古今の法也と云傳江言云
亀山城志て五月十日新を防き堅固に籠り所々より
後詰なき時ハ糧さへ有れハ忽滅亡仕ハ唯打出て
一戦して名を後代に残しぬへしと申ける所に家老共と
云ふハ先小姓共退きしと城主ハ謀事をも合戦にかかりし合戦
ある時ハ城を出て戦との大将の命令を守り後々とある
細川の新ハ打出て城の大手に手痛く切て廻る所ハ大に周
章し寄手の備数ヶ所後陣ハ悉く備を乱し大
将も一旦実をも落ち者共城主寄手ハ撹乱千騎一度に城へ退

もりなとも出て合せ追々返門攻戦に寄手城主なと元
東小勢の中昨夜ハ大軍に守て籠窓して討死候者共
深勝に逃乱て城中へ乱入本丸より西江又寄山口新吾清典
河部次郎右衛門大野伊左衛門等ハ十文字の鑓を入山
田吉左衛門長刀の名人西尾源七郎長谷川宇兵衛同孫右
衛門松井宗助水野兵部等籠居たる歟の四人をこそ
三方へ立分れ大勢を突崩し四方八方へ切ちらし罷出歟
去ハ討小勢ニ而切立城外へ逃出足元を見利長も後陣前田
荒人馬共本丸口追引大小戦出ハ及の討死しける

合戦に信弘が御方に敵味方の目を驚しける長刀の達人
裁大長刀を振廻し雑兵を通り捕の法にて息をつかせ
戦ふ事七八度也信弘も道の大将なれば信弘者人に劣らぬ雑兵
信を見て逃るが夜の長さに斜首中村兵太夫大石兵衛
小兵衛を大将として捨兵城は信弘是を見て其周の御二兵衛
よしとなりおく二人見るに雑倒れ時に山崎四郎兵衛は大法
の名人横山左内と授て利長の命なり抜免し信弘を
討んとせむ見て当手の雑兵人山崎に渡し討をもち
け時信弘今記母は大刀の名人なりの敵大将右衛門を団

を見るよりあんとて材木大石を人々に捧せ池来り敵陣
へ投かけ二千余人を梯を並へてせめ数百の敵を大に驚き是は
人々に二に城中へ進むと見るやうく狩隊して城を又乱母
を討せずなりとて大将正弘を初大勢實を女人を川わにて
城中へ入んと所を大き敵余をもて進来るを信弘一番
にあとに返して第に敵を防ぐは道の大勢が中を見して
をしけるが記を大敵に雑兵来り信弘方討死して信弘も
雑兵を底を蒙りければ城へ引事ならで所々へ引抜皆
息を隠して居りけ時当手の物頭田中助左衛門大平郷兵衛

山崎治部之隊三多勢小勢を以名若党押寄し二ノ丸江
敵自ら切て入込之事後日證もし味方ニ討取て
入正弘父子ハ是を推参者なり廣言して助太夫か西脚を雑居
しき且居を押掛しに味方不遠切入られ正弘
を防く二千余の軍勢を催せける前太夫山崎を門之本陣へ
迎而付修弘父へ一番ニ乗入八軍の勝負を不及見ゟ
本丸を掛り腹切んとて正弘を弘ハ宮朔の也人
上ハ討殺る一族郎党とも枝室を傾けゟ二千余
修弘ハ退出を消して山口父子城中へ入て済して

所望ニて自害せしと雖諸士も心隠謀中と
也一ヶ所を打破り城中へ乗込て腹を切人もありけれハ正弘
を物頭共と同心して数多の敵を切伏城中
へ破り本丸ニて正弘父子腹切文字を切ゟり二ヶ所年寄
ハ父子と共ニ登り其後従者十人同所ニ腹を切ニハ

二十四万石　因幡鳥取之城主　宮部兵部少輔

ハ継潤長房ハ代々仕へて武名を中国ニ揚たりけれとも
石田ニ一味せしニ依て数代の旧領没収せられ今中を免許有
流浪せりけるか田前之思不絶

一万石　浅谷隠岐守

一万五千石　寺田備前守

二万五千石　斎藤左衛門督

三万石　清源右京亮

一万弐千石　粕谷内膳正

右五人ハ皆大閤ニ忠節ヲ尽シ此二君之上ニ成て武威を振
ひしか石田と一味して此戦ニ敗北皆家を亡シ其身流浪
せり

三万八千石　信濃上田城主　真田安房守昌幸

昌幸ハ神武天皇五十六代帝之貴親王の後胤也親王ハ信濃を
領し給ふ於小海野ニ居住ニ而薨御有ニて霊を祭り神
白鳥明神と号し同村海野ニ至時より東ニ社を立て今に
其後親王の末孫海野ヲ号しとて号し其子海野幸氏とて
海野小太郎幸恒と云是より二十七世海野小太郎隆幸ハ武
田晴信ニ仕へて深く忠を致也是ハ弾正忠ノ名ヲ賜ふ
田家ノ武とて幸隆ハ天正二年甲戌五月十九日病死年六十二其子
二人嫡子源太左衛門尉信綱舎弟兵部同三年乙亥五月廿一日参河
長篠ニおゐて討死次男安房守昌幸父ノ跡ヲ継　上田城八万石　領ニ成

田家滅亡後は家康公へ属しけり其後秀吉公へ従ひ居城を
とゝ成京勝乱の時迄ハ家康公へ従ふ二男左衛門佐ハ秀吉公ニ上
野犬伏迄出陣しける処に石田三成か挙兵を聞けれは忽心を
変して居城へ引籠り籠城す　秀忠公は中山道より諸城迄
御発向有て以大軍を以て攻給ふといへとも不落終ニ関東の軍
急なれは押への兵を残し御上洛也（秋田志昌幸合戦の節秀忠公も御城攻めの由也諸説有之委細不詳唯昌幸父子）
大坂の陣の事ハ京都にて石田方悪く敗北に及と聞ゆ昌幸
父子に縁有る兵粮を入れて籠城して相待ち居る処に籠城の内
東軍をいつ忽押寄攻破り御感に預りしと申伝え

云ハ家康公信長公の元来武勇の志ありて其家四を
事なれは数度の戦に其功を顕し信玄に被加へ合
節に仕へ忠信をもつて毛頭不実なく仍て晃家ニ於て忠
勝か幸を出して行く年級を入れて昌幸幸村を招きしに
信幸伏して奉り信列へ行又子に対面して種々に諫云ケ
加へ諫言をも聞入すして昌幸不善の御趣に従ひ妨
より家康へ仕へ其上忠勝か聟なれは　家康心を諫
小心を忠もとに又々昊見に施ひ　家康を判数
世其後元付として小兄弟前々に列へ其用の諫言推察也

とも力ニ成と擬中ゟ信幸かもる謹奉其の御恩ニ報ゟ
内府公ニハ父の所行かれハしら/\識せん謂なし・・・十分ニ父昌幸
不献也只不可雌雄を決せんと思ひけれ大事の御使ニ来りし
細而中ニ於テ討死せハ君への不忠ニて是にて又勝負仕
らんと申入度しと待居へしと云。昌幸も尤と思ひ
公へ其の旨ニ入ニ信幸ハ沼田へ罷帰り昌幸ハ上田へ取籠
見返さの事其ニ云ゟ　内府公又ハ秀忠公を
感給ひ沼ハ如何也只父子の其引別りて・・・と信幸
幸ニ落ト上御前へ出て宿所ニ帰り相謹まで度の後

内府公の御用無之と仰られ急き人用ニ行けれハ右之趣　公仰ニ
何とて安ニ来りし事ある也と平安ニ信幸謹て今
度父子打分れ候所存ニ候而新当家ニ候而御恩の
御用事と存奉仕相謹仕度と申上ゟ　公是を聞召て感御
父兄ニ而御当家へ忠を尽し信幸謹て謹服して又宿所へ
帰り先ニ父の御前ニ於て御許給の事ハ能ニ付公仕中
内府公是ニハ其方不足識故加様の事ゟ又ハ武具等の所
望ニ中とゟ有けれハ信幸謹て父ゟ下命望の由申上ければ上
の恩感服也能ハ先達の御用事を返し上仕度と涙を流しても

十二日　公大小の差を捨して家康の御前に進入有しか
皆存して小早川秀秋を召て御身の頼む所也又東軍の一大事
を御身の手本の忠なる事不處しもつ味方と成る上意也秀秋謹
て此旨を上刻依刻に記目ふ其十七日に小田原城を守る大小姓
忠職を賜ふ三日節山不動を以久土山に蟄居しにて品聲を
慶長十四年六十四歳にて彼方にて病死なり常村に同
十九年甲寅秀頼公と浅野但馬守長政と共に出勢備
しもて討死に元和元乙卯年五月吉之年四十六歳　其細越後記に是を記して信春
小高城を賜りなお其子孫忠勤を励む其後同国松代城へ移

都合十万石を領し子孫今に繁栄也

二百拾二万石　中国十三州大守　安芸廣島居城　毛利右馬頭輝元

輝元は平城天皇より七代の後胤にて初名は幸鶴丸と号す
毛利備中守元就の孫大膳大夫隆元の長子也　此元祖数代の係毛利氏に委しく記之　又
隆元雲州大守尼子十郎晴久を毛利家の方に属せしめ紫を
退治せんとして永禄六癸亥年藝州佐々部にて二月四日の
晩藝州佐々部にて頓死せり　年四十一
同州吉田大通院に葬る其時幸鶴丸十一歳なりしかば毛利家
相続し元就小早川隆景完戸安藝守隆家其外

軍兵を集め其中にハ父隆元の旧臣并に譜代の者多く馳集り
にもまし父の仇尼子を討んと出雲国へ発向して尼子か
城を攻父の敵を晴さんと一戦に及ひ元就ハ出陣して
尼子晴久ハ挑戦出馬し石見国に発向して四方に一揆を起し皆
威勢を振ひ中国を切取けれハ尼子勢ハ所々にて一戦に及ひ
陣を張と出雲の東の方ハ山中毛利勢か方へ向ひ
へと晴久元就へ挑戦ありて元就ハ開く事年をへて神助
成し心底大将の器量也毛利家数代繁昌も此時に端あり
に依て晴久乃所終に滅し輝元晴久雲州へ働き合戦

前に尼子利を先として城ハ落行終に死去に随ひ数代雲
州の大守たるなれ共尼子晴久か時ニ至り子孫義久九郎四郎倫
久ハ陽四郎秀久等皆大将として志て日々合戦ありしか
国中大小諸侍悉く輝元日本の上へに属し
忍河守和睦乃事を望ミ尼子三将上京して終に毛利ト
の幕下に属し城を開渡し終に中国十三州悉く
平均し毛利乃下知に随ひ元就ハ元亀二辛未
年六月十四日逝去 年七十五 也輝元家督し数ヶ国に武威を振ふ
其後織田信長天下を統し中国九州迄も手に入んと

元毛利家へは使者下向度々下占矢石戦ひは禅元の取扱
ふゆゑに和議成して天正十壬午年羽柴筑前守秀吉に数百
騎を差添先向秀吉中国発向として数月毛利と合戦に及ぶ
同年六月二日明智光秀が為に信長横死せられし時禅元の謀
吉の武威を感し備中備後伯耆三ヶ国を遣りて和睦なり
其上武具軍器を合力して於城引山崎にて光秀を誅し
其後秀吉公天下の主将として威勢に依て同十三年七月関
白宣下の時禅元ハ忠ありとて叙従三位任中納言補五大老
職に禅元面目ありて猶忠勤を励ましむ其後大谷吉継卿男既

ハ石田三成深く睦しく秀頼の命として天下の諸侯を語
ふ中にも禅元を忠大将に頼みし禅元も元来太閤の厚恩に
預りし後の大事なれは速に石田に睦しく大坂西丸
家康公留守居佐野肥前守正綱を追出しておくへ入替て
籠城しけり然るに関ヶ原敗北してより大坂へ帰り大将島右
を家てゝ禅元驚きを催し本陣の前面へ移り判定して
宗瑞と号し家康公へ申上けるは今度石田三成私の
逆意を企て御為の令として一向禅元を忠大将に頼みしは
大谷の所存恩に預り事は是とも迷惑に存候

初君の為に知数照止蓋機せしの其実跡を見聞ませ
まゝ皆石田か嫡孫なりけり依て本城中を退き津軽乃
別墅に忍ひ退きて寓を止めて入定せり今ヶ茂の面影
徳川殿へ對し野心を含みて謀叛なし右の難を免石
一命を全ふ聊の子孫一族共に永く　公の御為に尽し太
若ども亡ひへと云ふ中にも　家康公若年ニ毛利小敷代中家
大きにしてく一族宗帝下恩顧の輩も中にも久敷禅元を
存ふ残党悉く中国播磨也紀の退路落着なし
亨一禅元か謀叛任なく数刻も討なりしを本業なり一命

東照宮御所の御遺命を残す石山ぬ聖の田家裏儀にて御事とて候
武家ニ後年慶長五庚子年十月十日関ケ原西列の所ニ於て同
十月寓居門宗寿館を石の御下を避け禅元と致仕
其後同年十三年戊申十一月寿館ニ賜松平隼人正孫娘
宗亨禅元ハ寛永二年乙丑四月晦日逝去 年七十三 也と云々
松云禅元逝去後寿館継嗣台館家督相続ス勤の内ニ
ハ道半の事ニ入道して後ニ後から次ニ禅元
男公ニ和睦の大名と成其後石田ニ一味の内ニ大
谷紀兵衛京起ニ於て田ニ志ちて事ちに於の界ニ附

其大概を記

二十一万石　筑後久留米城主　毛利藤四郎秀包

秀包は毛利陸奥守元就八男也輝元秀吉和睦調ふ時被
中秀包は桂民部大輔と云者智元就人質として出お
より大谷にかゝりの節目付秀吉は筑後国を給り官位昇
進して従四位下侍従治部大輔に任し世に久留米侍従と云其後石田
に与し輝元の下知を受て宰相に加り後石田方に加り
しか共不及一戦治軍に芸州迄引退して子細有て
秀包は被改易ゝ病死ス全嗣なく断絶也

二十二万石　吉川内蔵助廣家

廣家は吉川駿河守元春二男にて毛利元就の孫也号吉川半
八筑後国住人吉川治部少輔興経或云興経は元春叔父也と云者為養子故也
其後元春十三歳也少輔次郎と号家督ありて後治部少輔又駿
河守毛利輝元の下知として中国十州の政事を諸済秀吉
輝元和睦も元春小早川隆景として取結して輝元と謀し
和睦を結ふに秀吉感して就家を一家に勝其後病死
治部少輔元春家督を継付して元春子相続して世に防州
隆絶せんと欲秀吉云元春負心無之依て不便の事とて

宗ハ元春か男広家を以て家督とせしか遂ニ贈従四位下
侍従ニ叙しけり広家兼て思ふ所有て太閤を励し給ふ所
逆意を企幼君の御為と号する族広家思ひ痛し太閤の厚
恩を数へて大津御陣城を攻る時ハ命を力戦し其後関
ヶ原へ出張しけるか時石田か逆意を其ニ知らしめ家康公
と兵ハ輝元秀元等の一族ニ異見して其合戦ニ不立合
彼是ニよりて見物して居る　家康公其僕を味方ニ属
承しむものといへと縁ニ依て太平の後広家ニ安芸石見下輝
元の家臣ニ被仰付けり広家嫡ハ父の勲を励し其後周防
男内記助広正家督を継後改吉川蔵人頭長門岩国也
或云広家か南家ハ無二の忠を以て家康公相違なし
下されけり輝元ハ不義なれハ十列を立て浪人となし広家
願を達し自分の所三十二万石を輝元ハ渡し我ハ浪人
となら也出山城も宛家勝浪人せしを台所
三十万石を家勝ハ渡り己ハ浪人となりける末孫の一ハ吉川
吉川也といふ
一万石　赤松上総介則房
則房ハ村上天皇の後流赤松律師則祐か末葉也幼少より

長公に仕へ其後秀吉公に従ひ七組の番頭を司り従五位
礼ニ叙す東へ赴く将軍家より福島正則を相手と致し
浪人と成り出家して慶長五年十月朔日切腹致し給ひける
此以後赤松後裔断絶し給ふ

二万石　伊勢神戸城主　羽柴下総守勝雅

勝雅ハ勢州国司北畠中納言具教卿一族木造左衛門佐具康か
長男也始めてハ木造父子ハ国司の家臣勢州ニ仕へ長公へ属し其後信
雄卿の出世に随ひ木造父子も信雄卿の信に属し成し
其時も其子細織田家を辞し秀吉公へ従ひ属し其子細見る

州軍記に此勝雅殿之名誉ハ勝雅ハ武勇智謀兼備の老臣
故秀吉公寵臣也是故ニ羽柴氏を賜り叙位五位ニ任し下総守
城主と成　家康公　秀吉公和睦の使とも勝雅へ仰付しに
此和睦調　家康公上洛有て秀吉公対面の砌勝雅か君
命を不被辱を賞給ひ秀吉公甚感給ひ其後勝雅ニ一
文字の太刀并黄金十枚を賜ふと也然ニ勝雅も石田三成
居城ニ籠り東照宮御勝手を謀き出陣ニ付て奥ニ宥免
被成城を被召上何国共なく落行ける
然るに其後子細ありて知行二万石下さる由件の

大概之記也

二万二千石　伊勢桑名城主　氏家内膳行廣

行廣ハ濃州住人氏家常陸入道卜全か末葉也父卜全ハ信長
に因て軍ハ利を失ひ弟下に属し夫より秀吉公へ仕桑城
を賜りぬ石田と与して居城に籠りしか孫平を以て降参して既
逐電せしか西国へ逃行入道して道斎と号し為居て元
和元年大坂冠に籠城して天王寺口の防きを為し或ハ一氏
男を振ひ五月八日城中に於て切腹す子三人有父と一所に籠
城せしか京都へ逃行しか不図生捕て切腹同年七月晦日
妙覚寺にて三人共に切腹す行廣なり是故に氏家の苗裔断
絶ス弟ハ難波記にも見えたり又行廣弟志摩守氏継も一
万五千石を領し兄と一所に籠居して逐電して
後にて病死せり

二万石　豊後臼杵城主　太田飛騨守政之

政之ハ石田に与し佐賀関にて海陸共に戦を防く役
人也因て居の城を中川修理大夫秀成ハ無二の関東方なる
故に公命を奉して臼杵へ押寄合戦ス終に城の要害堅固
にして且つ政之か家の大力家長大井何某と云人に有り別て

先殺手の富士に下知を加へ宗徒ありて討数して川入ハ先
砲を放せ衛をとゝめて防けれとも中川か家初村等に振
て中川攻艶ときを挙ける程に是合戦に成りけれ
茶城を守て彼中に城を取て忍寄て中川討落し
其城番を守て来遊ヘ渡りけれハ改之助秀吉公胡
難の峠を越へ渡海して何方迄へ向て向の先鋒を打
破り城中ヘ突て入数百の兵人討て城の一番乗して大功
諸大名是を望せし冨強多方人とぞ

四万二千石　越前府中城主　青山伊賀守忠元

忠元ハ父を継て丹羽越前守長秀の麾下に候長秀
公に仕へ〳〵病死後男三年於忠元家督して任従五位下伊
賀守其後石田方に与して大谷か陣に属て時居城へ招
請し家康東方の軍を襲して攻落んと程鋒勢を退治せんと
摘毫か如に大谷ハ家康の命をうけ討死して石田に方縁ありて
算を城を捨て落行所ニ流浪せしか元和元年小幡将
公へ詫言して大坂の籠城して一旗頭に討死せしとぞ

五万石　越前東郷城主　丹羽備中守長昌

長昌ハ越前府中長秀二男也幼少より秀吉公の近習と

仕候ニ之先ニて籠城ニ籠城被成も石田ニ与し立籠
小身一部之時ハ武威を振ニ寄ニ家康公を卒て追亀出タリ
故後ニ長曾我部を逃去後丹波先手ニ出テ居
其子孫被為ニ仕と云也

二万石　多賀出雲守
一万七千石　横濱民部少輔
一万六千石　杉谷越中守
一万石　寺西下野守
一万九千石　杉若越前守

右ニ人皆秀吉公ニ仕ヘ候ニ己身其後ニ叙従五位下を家
の前所賜物ニ候故石田逆意の時秀頼の命と受ケ而反
是義同心候大谷吉隆小西下向ニ候ヘ共大津ニ而之兄
家康公ニ背かれ候ニ付大坂従佐家ト家ニ一揆ニ而用意之乱
ニ石田被軍出し卒ニ皆逃亡去て諸士逃去ニ出居
て世の有様を何も承候一生流浪ニ果ける
私云右之人の由緒且子孫諸家の陪臣として召抱
其事ニ承さ及ニ候て只石田ニ組せし諸将と云
所知せん為古記録を書候委見于太閤記

一万八千石　筑紫上野介義冬

第一ハ清和帝後胤足利左兵衛佐忠氏の末葉也　然レ共但ハ
京都将軍之親族代仕へして将軍家喜ハ第初メの附
より京都を出奔し信長ニ仕へ其後秀吉ニ従ひ
ノ由緒有例の者として今社寺料又領有本国字徳善院
ニ諸事裁許を御任しなりけ人ニて当ニ万石を賜しけるハ
秀吉公へ仕へ人身ニ成ける所を江石田ニ与し其元家蔵
大津迄の附被出小志ニ寄ル五万ニ利を失ふニ依て宗
蔵大坂へ案候を以て接告を請ける石田謀元野蔦誅将

大坂荒所ニ付降参致し接兵の目ニ逢ひ其の後筑前江
筑人ニ貴殿は居ル馬廻り成り右田殿人を被召放候へ大津へ被行候
時ニ勝手に与され振い候処破城を致し落候其ニ第ケ条へ出
陳也へしらせ奴ニ味方悪く候所ニ候て京都の大徳寺
江逃行出居し後ニ召出され御留置へ被召石加三千石
を被下候第一病死其子主水ニ家督被下相違なく御用
勤行候処寛文元癸丑年九月主水病死候男左近同年
十月九日家督を継今ニ至る勤行候

一万石　松浦伊織也當年一五

秀任ハ松浦安芸守法印也初安芸守と云時秀吉公の
馬廻ニ召出されし時之か為ニ作様して安堵しけり後
石田方ニ而して大津の城を攻ける時之兄宗茂と一所ニ合戦
ありて秀任強力ニて鉄の柱を薄物抜ニこる程の芸を人
馬の先列ニ立て数ヶ所ニ?倒れてに二の城戸を抜破り二の
城戸迄攻入しかハ大将上を志皆殺ニ討死してけり御
?宗茂大ニ感ありて右平治後松浦か家流浪して居
ありしを扶持してけり被成ニ秀任ハ子孫ニ住官致

二万石　堅田兵部少輔広澄

一万石　石川掃部頭頼明

右ハ人も石田方ニ為りて之兄宗茂ニ加勢して大津城を忽
攻落し其後又美濃へ打後せんとせしか石田敗北と聞
て伊国へ逃帰りて縁か味ハ隣坂本治ニ加へて所在る
もハ被陣へ逃行共作出致し程??不叶十
月朔日切腹ニ而其首を三条河原ニ送り石田首の東
の方ニ掛けニ?ありけり掃部ハ石川か是掛けニ?ニて事ハ
家康公御見の為ニ御?附石田か妻の?を?め?を
治ハ此?所ニ?又火を職しと叶けり?軽?来?

く計に然の各人は此にて其弟頼綱為して凡劉の被法
院殿一忠入院に火を放へともは如何を捨て恐見と
為め揃捕て御家へ戦はす時子細を構同様で石田へ不
為の由仰せ出し件の趣委細を言上す　家康公は其趣を
聞召て更に其領地をも召上られ石川を大坂西丸に押籠
置給ふ所に今度大津へ向ひしも石田方に付しと決をも
忽に語を先前代未聞の剛人とて彼は諸人の見懲にせ
よとて領地を石田同罪に東を甘らすと也

一万六千石　　別所豊後守吉治

吉治は其先播州三木城主にて智勇兼備の大将也卿にて
播磨国他を列を從へし其代迄中国に武威を振ひ代々
目の前の小三郎は丹波国後但馬二ヶ国の主波多野と同時に
治り兼也故に威福世に振ふ時節に天正八年右信長公織
田家大半攻治め時節に小三郎を幕下に属せよと光信織
より以右長治へ取つ祖業を長信長公の命を受て
大軍を催して長治城攻事数度也既多日を刻前に不和
となり御を受しとも防ぎ兼に秀吉公毎度利を失ひ終に
于時秀吉公業を尽して城中攻ほしける時に味方苦

手痛く其上西国勢の加勢も一向参らす候故
城中兵粮尽果しかは世も是まてと思ひ其日より大将別所
方々の集め三木の城に立籠り後巻の軍を止て酒宴
様無く縄して用心稠く日を送る城兵の心は猶々
兵粮の通路を留られ城中の者共飢に及ひ難儀せり
依て長治并兄弟三人自害して諸人
の命を助へしと請ふ秀吉是を聞て尤なる哉と秀吉の返
答に城を立て二人共に自害の上は士卒雑人の命を宥しての助也
長治経は天正八年正月十七日自害して諸卒雑

人の命を助くこの時秀吉は別所三木城の後攻西中国を
攻治給ふ別所豊後守長治は長治か事にて此時侍大将
打ち城兵等を恐し侭り逃行武家を頼
頼り秀吉云天下を治る豊後守を
家臣の田家氏家の者なりとて石高一万五千石を給
を領せる城 先は別所 後に細川 丹後田辺城 細川 幽斎
の居城を小野木縫殿助を大将として諸将共に治
も責る共の国より池田力戦し厚く敵を退け
…

罷帰り候て小幡罷出候

一万三千石　藤掛三河守

一万石　高田豊後守

此両人は大谷刑部と一所に北国表に居候て石田に与し候て小野木と

一所に田辺の城を攻候へとも後に味方に心を通し候けれは

戦争も終りて其後家康公へ一礼を申して本領安堵

罷り出仕候子細不詳

一万石　中江式部少輔直澄

一万石　蒔田権之助

右両人は石田一方にて勢州阿濃津城（城主富田信濃守信高）を攻来

西軍大将にて攻寄河内守被[illegible]落城の後出家し

高野山にありしか関ヶ原敗軍の後城を明け[illegible]亡し

蒔田主膳正殿は子細ありて御当家へ召出され

其外ちて不記

日本政府圖書
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan